

北九州芸術劇場 + 市民共同創作リーディング

平成26年度

Re: 北九州の記憶

戯曲集



はじめに

私たちが記録として知っている「街の歴史」には当然のことですが、私たちの身の回りの、ごくごく個人的なことについては記されていません。ですが、確かに当時を生きた人達はその場所に住んで、日々を暮らしていました。その時代に生きた家族のこと、仕事のこと、結婚のこと・・・様々なエピソードの「個人の歴史」が集まるとそれもひとつの「街の歴史」になるのではないのでしょうか。

「Re:北九州の記憶」では、北九州市に暮らす高齢者の方々に、地元の若手作家がインタビューを行い、1つのエピソードから発想を得た新しい物語を作りました。

この作品を通して、過去も未来も主役はこの街に暮らす私達である事に気付く事、そしてこの作品達が、この街の財産となる事を目指しています。



## 目次

ながめる	作	守田慎之介	1
まちなかのカフェにて	作	守田慎之介	17
ダムへはじまり	作	穴迫信一	27
続・小倉の話	作	穴迫信一	40
不思議なことでもあるのかい？	作	寺田剛史	49
ヨシモト流	作	寺田剛史	62
隠し砦の三女子高生	作	脇内圭介	74
冷めたライスカレー	作	脇内圭介	91
「家族」	作	藤本瑞樹	108
最後の結婚式	作	藤本瑞樹	122
左官屋さんの恋	作	塩津順子	134
スーツの人	作	塩津順子	144
製鐵のタオル	作	坂井彩	159
うたいましよう	作	坂井彩	170
バイオリン弾き〜戸畑夜宮青少年センターにて〜	作	鵜飼秋子	183
待つ女〜小倉ある駅で〜	作	鵜飼秋子	199

ながめる

作 守田慎之介

【登場人物】

文子（毎日のように電車を眺めている女の子）

秀子（文子の友達。活発な女の子）

電車の停留所近く。

文子が遠くを眺め、座っている。

と、文子が立ち上がる。

電車が入って来る。人々が降りているようだ。

文子

おー。

文子は指折りをし、人を数えているよう。

文子

うん、うん。

電車が通り過ぎて行く。

文子は、またその場に座り込み、遠くを眺めている。  
と、そこに秀子がやって来る。

秀子 文ちゃん。

文子 わ。

秀子 何しよん？

文子 ああ、秀ちゃんか。

秀子 うん。

文子は、また遠くを眺める。

秀子 え？答えは？

文子 え？

秀子 答え。

文子 答え？

秀子 私が言った、何しよん？の答え。今、この辺で宙ぶらりんになったままの  
問いかけの答え。

文子 ああ。．．．うーん。

秀子 え？難しい質問？これ。

文子 うーん。

秀子 何しよん？つち、挨拶みたいなものやと思つとつたんやけど。

文子 分かる、分かる。

秀子 分かるよね。

文子 え、何やろ。人を見よるんかな？

秀子 え？

文子 うん、多分。人を見よる。

秀子 あ、思つとつた感じのと、ちよつと違う。

文子 え、何と思ひよつたん？

秀子 分からんけど、誰かを待つとるとか。

文子 待つてない、待つてない。

秀子 座つとっただけ？

文子 だけつち言うか、ここにおつたらさ、電車が来るやん。

秀子 うん。

文子 そしたら、人が降りて来るやん。

秀子 そうやね。

文子 いっぱい降りて来るやん。

秀子 時間にもよるかも、やけど。

文子 今はそんな時間やん。

秀子 まあ。

文子 ね？

秀子 うん。

文子 それをね、見よる。

秀子 ん？  
文子 こう。  
秀子 わー、よく分からなかった。  
文子 え？  
秀子 え？  
文子 だけね、電車が来るやん。  
秀子 うん。  
文子 そしたら、人、降りて来るやん。  
秀子 来る、来る。  
文子 いっぱい。  
秀子 時間にもよるかも、やけどね。さっきも言ったけど。  
文子 うん。  
秀子 それで。  
文子 それを、見よるんよ。  
秀子 あ、やっぱ、何か、最後の方で、何か、するって抜けた。  
文子 抜けた？  
秀子 すり抜けた。  
文子 何が？  
秀子 こう、何しよん？の答えが、するって。  
文子 え？どういうこと？  
秀子 うそ、説明せないけん？

文子

何が抜けたん？

秀子

質問しました、そこから答えをもらおうとしました、途中まで掴みかけて  
いました、と思つたら、最後のところでするーって、逃した、みたいな。

文子

え、難しい。

秀子

ね、難しい。人に伝えるのつち難しい。今、私も分かった。

文子

私が言ったのは伝わった？

秀子

文ちゃんのが伝わらんかったつちことを言った私のも、伝わらんかったみ  
たい。

文子

え？伝わらんかったん？

秀子

うん。

文子

ああ。

秀子

電車を見よるんやないん？

文子

うん、電車が見たいわけやないん。

秀子

そうなんやん。

文子

うん。

秀子

なるほどね。

文子

うん。

秀子

降りて来る人を見よるんよね？

文子

そう、そう。伝わつとるやん。

秀子

そこまでは、まあ、何とか。

文子

そこまで？

秀子　そこまで。

文子　全部よ、それが。

秀子　いや、何で見よるん？

文子　え？

秀子　人を。

文子　何で・・・

秀子　何で見よるん？

文子　何で、か。

秀子　うん。

文子　何でやろ。

秀子　え、分からの？

文子　じゃあ、ちよつと、伝えてみるよ。

秀子　頑張つて、受け取つてみる。

文子　こう、電車が来たら、人がさ、降りて来るやん。バーつて。

秀子　うん。

文子　バーつて、みんな一緒にドアから降りて来て。降りて来るやん？

秀子　降りて来る。うん。

文子　そう、みんな一緒に降りて来るんに、その後はね、（笑つて）バラバラになるん。

秀子　おお、何で笑つた？

文子　面白くない？一緒に降りて来たんに、（笑つて）そっからはバラバラなん。



文子 それはね、別にいいん。

秀子 あ、いいんやん。

文子 うん。

秀子 ふーん。

文子 うん。

秀子 楽しいん？

文子 え？

秀子 そういうのが、楽しいん？

文子 楽しいというか・・・え？楽しいんかな？

秀子 何、それ。

文子 楽しいとか、そんなん、考えたことないけど。

秀子 え？楽しいんやないん？

文子 分からんけど、んー、何か、ワクワクせん？

秀子 人、見て？

文子 そう、ワクワクやん。せん？

秀子 せん、かな。

文子 (自分を指し) するんよ。

秀子 するんやん。

文子 あれ？今日はそつちに行くんですかい、とか。

秀子 誰が？

文子 常連さん。



文子 色んな人がおるけね。

秀子 例えば。

文子 例えばね、えー、昨日までなかった包帯を巻いとる人とか。

秀子 怪我したんやん。

文子 多分ね。

秀子 わー、それはドキつとするね。

文子 昨日から今日までの間に何かあったんよ。

秀子 何があったかは分からんのかな。

文子 そりゃ分からんよ。

秀子 喧嘩？

文子 かも知れんし、転んだだけかも知れんし。

秀子 包帯よ。

文子 大いに転んだら。

秀子 んー、まあ、なるかもね。

文子 仮病っち可能性もあるし。

秀子 うっそ、仮病？

文子 一つの可能性ね。

秀子 え、何？遅刻の言い訳とか？

文子 それもあるかもやし、例えば、包帯とかせんでいいような小さい怪我なん

に、大げさに。

秀子 構って欲しい人やん。



秀子 色んな人がおるね。

文子 でも、みんな同じ電車に乗っとって、ここで降りて、バラバラになって、  
そんでね、誰もおらんくなるん。

二人は、停留所を見る。

秀子 あ、人がおるね。

文子 うん。次の電車に乗る人。

秀子 電車を待つとるんやね。

文子 降りる人がバラバラっておらんくなったら、今度はね、ちよつとずつ乗る  
人たちが集まって来るん。

秀子 すごい。

文子 すごいやろ。

秀子 どこ行くんやか。

文子 家に帰るんかも知れんしね。

秀子 そっか。

文子 そう。

秀子 うちん家がここやけ、どっか行くんかと思った。

文子 どっかに行くんかも知れんのやけどね。

秀子 そやね。

文子 うん。



文子 うん、うちらみたいに。

秀子 何か、面白い。

文子 やろ。

秀子 あの人たちが乗ったら、また誰もおらんくなるんやね。

文子 おらんくなつて、また次の人たちが降りて来るん。

秀子 じゃあ、ずっと誰かがおらんやん。ここに。

文子 最後の電車が行ったら、誰もおらんくなるよ。

秀子 終電。

文子 そう、終電が行ったら。

秀子 え、そんな時間まで見よるん？

文子 見てない、見てない。

秀子 よね。

文子 お母さんに怒られる。

秀子 うん。

文子 でも、誰もおらんのも思うん。だって電車が来んのやもん。

秀子 何か、寂しいね。

文子 どうやろう。見たことないけ。

秀子 だって、誰もおらんのももん。

文子 でも、また明日には誰かおるけ。

秀子 あ、来た。



文子 秀子 文子 秀子 文子 秀子 文子 秀子 文子 秀子 文子 秀子

ん！。

残業とか。

そうかもね。

うん。

うん。

わー、もう誰もおらんくなった。

ね。

早。

やっぱり寂しいのかな。

ん？

誰もおらんと。

文子と秀子は、電車の停留所近くに座り続けている。

まちなかのカフェにて  
作 守田慎之介

【登場人物】

義彦（カフェのマスター。町の移ろいをカフェから眺めている。）

真悟（集まりのリーダー格。）

秀一（真悟の幼馴染。）

直人（雨男。）

70年代。ここは町のカフェ。

カウンターの中に、マスターである義彦。

カウンター席に、常連らしき2人の男性、真悟と秀一。

3人はビールを片手に談笑をしている。

と、雨に濡れた直人が駆け込んでくる。

直人（雨を落としながら）だー。

真悟 おう。

義彦 いらつしゃい。

直人 いやー、濡れた、濡れた。

秀一 雨？

直人 そうそう。

義彦 アーケードで、そんな濡れる？

直人 向こうから来たけさ。

義彦 ああ、そう。

直人 不便やのー。バートと、向こうから全部アーケードやったら。  
の。

義彦 降り出したか。

真悟 ここにおると、分からんね。

秀一 わー、傘持ってねー。

真悟 気持ちわる。

直人 タオル貸そうか？

義彦 大丈夫、大丈夫。

直人 お前のせいぞ。

真悟 何が？

直人 この雨男。

真悟 シャーないやろ。

直人 どうしてくれるんか？

真悟 知らんが。

直人 傘がねえんぞ。

義彦 ほら、話があるんやろ？

真悟  
え？

義彦  
話。

真悟  
そうやった、そうやった。

秀一  
無駄話が多いけ。

真悟  
無駄やねえちや。

秀一  
ずっと、無駄話。

直人  
無駄、無駄。

真悟  
お前はおらんやったやろうが。

直人  
想像がつくんちや。

真悟  
うるせえ。

直人  
ビール片手に、女の話とか？

真悟  
してねえし。

義彦  
まあ、間違つてない。ビールでいい？

直人  
おう。

真悟  
しとらんやろうが。女の話。そんなに。

直人  
しとるやん。

真悟  
ちよつとはしたよ。

秀一  
こいつさ、前言いよった女がダメになつてさ。

直人  
あーあ。

義彦  
ほい。(グラスを渡す)

直人  
サンキュー。

真悟  
いいんちゃ、その話は。  
直人 え、それ聞かせろよ。

秀一、直人のグラスにビールを注ぐ。

直人 おう。サンキュー。  
真悟 それは置いといてよ。  
直人 勝手に置くなちゃ。  
真悟 面白いけ。  
直人 お前はね。俺は面白いよ、多分。  
真悟 うるせえ。  
秀一 好きやね。人の不幸。  
直人 心配しちやりよんよ。  
真悟 嘘つけ。  
直人 ホント、ホント。  
真悟 だけの。  
義彦 じゃあ、お疲れ。  
直人 ほいほい。お疲れ。  
秀一 お疲れ。

なし崩しに乾杯をする。

真悟 話、聞けちゃ。  
直人 飲ませろや。  
真悟 じゃ、飲めや。  
直人 お疲れ。  
真悟 お疲れ！

直人と真悟、乾杯。

直人 そんな怒らんで、いいやん。  
真悟 話聞かんけ。  
直人 聞いとるって。  
義彦 話が進まんのに。  
真悟 こいつのせいじゃ。  
直人 で、何なん？  
真悟 え？  
直人 話よ。え？つち、何か。  
真悟 そうよ。だけの、みんなでさ、外国に行こうぜ。  
三人 は？  
真悟 外国。  
直人 何で？

真悟 これからは外国を見らんと。

秀一 急に。

直人 の。

真悟 シャーないやろ？こんな町におったって。

直人 いやいや。

真悟 シャーないんっちゃ。

義彦 まあ、シャーないわな。

真悟 やろ？

直人 ちよ、話合わせちやらんでも。

義彦 いや、そう思うよ。

真悟 こんなクソみたいな町捨てて。

直人 クソって。

真悟 クソよ、クソ。

義彦 クソ、クソ。

直人 えー、そうかー？

真悟 じゃあ、何があるんか？

直人 何がつち、言われると、まあ、あれやけど。

真悟 の？

直人 でもさ、生まれ育った町やし。

真悟 だけ、何か？

直人 何ていうん？愛着？

真悟 そんなもん、1円にもならんやろうが。

義彦 炭鉱ももう、全然ダメ。

秀一 ああ。

真悟 そうっっちゃ。

義彦 鉄だって、いつまでも。

真悟 それ。

直人 いや、そうかも知れんけど。

義彦 スポーツもなー、昔は何でも強かった。野球も。

秀一 たしかに。

真悟 わー、強かった。

義彦 チームもいっぱいあつて。実業団の。バレーとか。

真悟 あつた、あつた。

義彦 それも全部廃れて行つて。

真悟 腹立つわ。

義彦 この町は、その川も汚い、空も汚い。

真悟 ドブちゃ、あんなん。

義彦 政治が、何も考えなしやけ。何も考えんで、目も前のことだけやるけ、よく

なるもんも、全然よくならん。

真悟 何しよんか、政治は。

義彦 そこに道が出来るんやけどさ。

秀一 道。

義彦 そう。あつちとこつちとつなぐ道が出来るんつて。

直人 へえ。

秀一 アーケード？

義彦 知らんちゃ。

直人 でも、それなら便利なんやない？

義彦 そんなんで何が変わるんかつて。

秀一 人の流れ？

義彦 変わったところで。

真悟 何も考えとらんな、政治は。

義彦 道が出来るかも怪しいもんよ。

真悟 どうせ、出来んよ。

義彦 出来たとしたつて、そもそも、歩きようやつらの顔が暗いんちゃ。

秀一 そうかね？

義彦 元気がない。

真悟 の。

義彦 やっぱ、クソよ、こんな町。

直人 うーん。

真悟 クソ、クソ。

直人 え？お前何か言った？

真悟 え？

直人 町のクソなとこ。

真悟 言わんかった？

秀一 言つとらん。

直人 全部マスターが言いよるやん。

真悟 俺だって、同じこと考えとつたんよ。

直人 お前が？

真悟 そうよ。

直人 そんなこと考えよつた？

真悟 何か、その目は。

秀一 じゃあ、一個上げてん。

真悟 え？

秀一 クソなとこ。

真悟 え？

秀一 この町のクソなとこ。

真悟 そら、お前あれよ。しよーもないんちや。全部。

直人 あ、お前、何も考えとらんな。

真悟 は？違うし。

直人 クソの政治と一緒やん。

真悟 違うちや。くらすぞ。

義彦 女がダメになつたけの。

秀一 あ。

直人 そういうこと。

真悟

そういうんじゃないちゃ。

秀一

おかしいと思ひよったんちゃ。急に。

直人

お前、女がダメになったけ、逃げたいだけやる。どうせ。

真悟

違うちゃ。くらすぞ。

直人

女と暮らせんやつが、何ち言いよんか。

真悟

そういうくらすやねえちゃ。

秀一

真面目に聞いて、損したわ。

真悟

違うちゃ。

直人

一番しょーもねえのは、お前やったか。

真悟

何でもいいけ、外国行くぞ。

直人

勝手に行け。

四人はビールを片手に相変わらず、ワイワイとやっている。  
義彦は話を聞きながら、少しだけ外を眺めてた。

ダム／はじまり

作 穴迫信一

【登場人物】

洋次

松山

ある山奥。ダムの装置室の中からダムの水を見る洋次  
ダムから一定量の水が放水されている

松山が駆け込んでくる

松山 洋次

洋次、水の音で聞こえない

松山 洋次、洋次

洋次、松山の存在に気付き

洋次  
松山

なにやっつてんだよ

聞こえない

松山  
それだよ

洋次  
え？

松山  
なぜこの時間に

洋次  
アセロラ自販機

松山  
言っつてないよ

洋次  
軍手ないよ

松山  
とりあえず

洋次  
ここら辺で落としたのか

松山  
戻っつてこい

洋次  
ちよつと待て

洋次、室内に軍手が落ちてないか探している

松山  
何してんだ

洋次  
(布切れを拾い) これはただの布か

松山  
おい、洋次

洋次、放水を止める

洋次  
似たようなものがあつたがただの布だった！

洋次、放水を始める

松山  
洋次

松山  
洋次

松山  
そう、お前だ

松山  
こないだ

松山  
お、ま、え（指を指しながら）

洋次  
え（と、後ろを振り返る）

松山  
お前だよ

洋次  
やめろよ

松山  
聞こえてないな

洋次、放水を止める

洋次  
おぼけ関係はやめろ

松山  
何が

洋次  
指差したりするな

松山  
それは、お前……（とまた指をさす）  
だから苦手なんださういうのは！

洋次、放水を始める

松山  
あーもう  
ただでさえ不気味なのに  
話を聞け  
松山  
寒気がする、ラジオラジオ  
洋次

ほぼ雑音のラジオが流れ始める

松山  
あれは  
洋次  
えーと……  
松山  
ますます届かなくなった  
洋次  
雑音うるさい、怖い  
松山  
洋次  
ふうー  
松山  
こっちを見ろ  
洋次  
まだまあまあ怖い  
松山  
こっちを見ろよ

洋次

ラジオ：

洋次、ラジオを止める

洋次

気色悪い

松山

お

洋次

もうたくさんだ

松山

おい、洋次洋次

洋次

ちくしょう

松山

洋次、こっち見ろ

洋次

怖い

洋次、松山を見つけ、放水を止める

松山

洋次

洋次

お前のせいで怖い

松山

分かんが、すまん

洋次

今、一人にされたら本当に怖い

松山

俺は何をしてしまったんだ

洋次

こっちに来ないか

松山

それはいいが

洋次 もしくはそこにずっと居てくれないか  
 松山 いや、装置室へ行こう  
 洋次 男二人で気持ち悪いが  
 松山 狭いしな  
 洋次 ああ  
 松山 待ってろ  
 洋次 嫌だよな、そりゃ  
 松山 どうした  
 洋次 ただでさえむさ苦しい場所なのに  
 松山 何が  
 洋次 やっぱり、来なくていいよ  
 松山 どうした  
 洋次 狭いし、そんな強要することじゃないなと思った  
 松山 え  
 洋次 わがままを言ったようで、すまん  
 松山 違う違う  
 洋次 大丈夫大丈夫  
 松山 そうゆう風には思っていない  
 洋次 本当に大丈夫だから  
 松山 違うよ、装置室に行きたい  
 洋次 来たいわけないだろ

松山

行きたい

洋次

行ってもいいけど、という程度だろ

松山

お前と話がしたいんだよ

洋次

話すことがなくはないけど、と聞こえる

松山

違う

洋次

いい、いい、無理強いは

松山

お前に用があるんだよ

洋次

嘘つけ

松山

本当だ

洋次

じゃあ何だ

松山

女の話だ

洋次

女の話

松山

もとい、尻の話だ

洋次

尻、あちっ

松山

どうだ、そっちに行くから一旦放水をやめろ、嫁さんの尻の話聞かせてやる

洋次

火傷するかと思つた

松山

な

洋次

聞いてなかった

松山

だから嫁さんの尻の話

洋次

藤子さんか

松山

何だよ

洋次 焼いたゴムみたいな匂いがする藤子さんか  
松山 失礼だと思わないのか  
洋次 藤子さんはあれか  
松山 なんだ  
洋次 体のどこかでゴムを焼いてるのか  
松山 それはなんというシステムなんだよ  
洋次 摩擦か  
松山 やめろ  
洋次 藤子さんは、いい  
松山 え  
洋次 他をあたってくれ  
松山 馬鹿にされるだけされて  
洋次 興味が、ない  
松山 ……  
洋次 ないか、他に  
松山 くそ  
洋次 ないか、他に  
松山 わかったよ  
洋次 お  
松山 では、事務の麻美ちゃん  
洋次 え

松山 事務の麻美ちゃんならどうだ  
洋次 何でお前が  
松山 どうだ  
洋次 麻美ちゃんのお尻を  
松山 だから今から詳しく  
洋次 麻美ちゃんのお尻ー！  
松山 ああ、そうだ、お尻ー  
洋次 もっと、お尻ー！  
松山 お尻ー  
洋次 違うもっともっと、お尻ー  
松山 お尻ー  
洋次 所長室に届くように、麻美ちゃんのお尻ー！  
松山 やめろ！  
洋次 ！  
松山 なにより麻美ちゃんを傷つける  
洋次 では早く来いよ  
松山 今から行くよ  
洋次 揉んだのか  
松山 どうかな  
洋次 手でパチパチパチか  
松山 拍手みたいに

洋次

松山

洋次

松山

洋次

松山

洋次

松山

そうだ、左の房を左手代わりに、いや違うな、左の房は左手と音を出し合うわけだから右手か、そして右の房が右手と、だから左手の代わりになるのか

楽しそうだな

詳細に話せよ

分かっているって

あ、ダメだ

ん

来なくていい

洋次、おい

洋次、唐突に部屋の中へ戻ってしまふ

松山

洋次

どうしたんだよ

お前、見える側の人間だったな

洋次、放水を始める

松山

なんだそれはー！

水、流れ続ける

松山 水を止めろー！

水、勢いが増す

轟音の中、叫ぶように会話をする二人

松山 洋次ー！

洋次、何かを考えている様子で反応しない

松山 洋次ー！

洋次、松山の方を見るが反応しない

松山 洋次ー！

なんだー！

何がしたいんだー！

言ってるんだー！

何をー！

水がー！

何てー！

松山 洋次  
洋次 ここじゃないって

松山 なんだつてー！  
洋次 居場所じゃないと言い張る  
松山 洋次  
洋次 確かに聞いた  
松山 水は喋らん  
洋次 聞いたんだ  
松山 水ならただの液体だ  
洋次 そう、自らただ生きたいと  
松山 何を言ってるんだ  
洋次 分かってるじゃないか  
松山 聞こえーん  
洋次 俺と同じなんだ  
松山 もう声が出んよ  
洋次 ここにきて俺が一番した事はなんやと思う  
松山 なぜこんなことを、洋次  
洋次 ただぼーっとすることよ  
松山 洋次  
洋次 学生ん時はそんな時間一分たりとなかったよ  
松山 ばれるのも時間の問題だ  
洋次 こんなに落ちぶれるとは思わんやった  
松山 一緒に謝りにいってやるけ

洋次 もっとバカバカしくても華のある生活を送つと思つとつた

松山 話はそれから聞くけ、なあ

洋次 しかし辞表じゃ辞めれん

松山 ……ここ、やめるつもりか

洋次 さつき、放水のコックに手が触れたとき、火傷するかと思うほど熱くなつ

とつたんよ

松山 洋次

洋次 勝てない麻雀も、やれない女の妄想も、もう終わりだ

松山 洋次

洋次 気付かんうちに、俺は追い込まれとつた

洋次、放水を止める

松山 洋次

洋次 松山

洋次、ダムの水を覗き込む

洋次 皮肉だな、松山

松山

洋次 減つたようには見えん。

続・小倉の話

作 穴迫信一

【登場人物】

サトル

ユイ

ヒデオ

エツコ

2014年、小倉の街、井筒屋本館と新館の間の通り、  
若いカップルが立ち止まっている

ユイ ……?!

サトル ここ

ユイ 本当に?

サトル ほらあれ、あそこの壁

ユイ やっぱりかっこいい！

サトル 一話で座ってたのって、こんなんじゃないかってっけ

ユイ あー座ってた、二人が出会うシーン

サトル 二人の出会いをこっちからこう撮ることによって、道行く人も映るし、そ

んな中、平然と二人が事件についての会話をしているという

ユイ うん…

サトル どう？楽しい？北九州

ユイ うん

サトル まだまだあるよ、小学校、図書館、市場、あと紫川っていう大きな川でも、

川沿いで沢山の映画やドラマのロケが行われてる

ユイ 今日中に全部まわれるかな

そこに老人、ヒデオが通りかかり、立ち止まる

サトル どうだろうね、かなりの数の撮影が来てるからなあ

ユイ へー

サトル 北九州の今一番のウリだからね

ヒデオ、いきなり

ヒデオ …水

カップル、驚き

サトル え、はい？

ヒデオ 水だ

サトル 水、水だって

ユイ あ、はい、ちょっと待っててください、(老人に水を渡し) はい

ヒデオ、水を受け取り

ヒデオ これ：買ったのか？

ユイ そのこのコンビニでさつき

ヒデオ ふん、バカな女だな

ヒデオ、ユイに水を返す

ユイ え、あの

サトル ちょっと何ですか

ヒデオ 何が

サトル 水が飲みたかったんじゃないんですか

ヒデオ お前もバカなのか

サトル なんなんですか

ヒデオ 何が映画がウリの街だ

サトル え

ヒデオ それでなにか発展したか

サトル 映画の街として有名に：

ヒデオ なったわけではないだろ、お前だって知らなかっただろ

ユイ あ、はい、でも私は何にも知らないんで、バカだから

ヒデオ バカ

サトル ちよつと

ヒデオ こんな老人の街でそんな事して意味あるのか

サトル 僕らは若者ですから

ヒデオ 若者

サトル だから誇らしいですよ

ヒデオ それが町のためになつとるんか

サトル 町のため：

ヒデオ 私らのために

ユイ なってないと思います

サトル え、ちよつと

ヒデオ あの建物だつてそうや、でかいだけで何とも繋がってない

サトル リバーウォークはいいところですよ

ヒデオ キヤナルシテイやないか

サトル 似てますけど

ヒデオ 美術館も体育館もそうや、あんた行ったことあるかね、小倉の人間やろ

サトル 美術館、体育館、え

ヒデオ

あるかねって

ユイ

ないと思います

サトル

いや、だからちよつと

ユイ

え、あるの、ごめんなさい

サトル

いや、ないけど

ユイ

え

サトル

ない、ないない、ないですよ

ヒデオ

当然よ、あんなところ

サトル

あんなところって：

ヒデオ

スラム街よ。事件も犯罪も減らん、暴力的な街よ。駅の周りもパチンコばかり、こんなのは小倉だけなんよ。これじゃあいつまでたっても人口は増えんやろ、博多なんかより先に政令都市やったのにな、今じゃあ見る影もない、銀天街も、あの汚い市場も。汚いところに飯を買いにいこうと誰が思うかね。なあ、映画のロケより先にせないけんことが、山ほどあると思わんかね

ユイ

：はい

サトル

：

ユイ

：ね、いこ

サトル、反応しない

ユイ

：黙って聞いてたらすぐ終わったじゃん、ね

サトル  
：

ヒデオ、サトルを見る

ユイ  
(ヒデオに) お話ありがとうございました、では…

ヒデオ  
ふん

サトル  
ありがとうございます。目が覚めました。映画のロケが来て沢山喜んでる人が居るからってそれが何だって話ですよ。お年寄りの方には関係ないですもんね。リバーウォークも中に入ったら複雑で。お年寄りの方とかよく見かけますけど迷ったりしないんですかね。且過市場も確かに汚いですよね。周りはあのままでもいいって言うてる人ばかりですけど、どう考えてるんでしょうね。

ヒデオ  
あのな：

サトル  
どういふつもりなんでしょうね。他の人たちは

ヒデオ  
馬鹿なんやろ、何にも考えてないんよ、そしたら不満も生まれん

サトル  
大好きなんです

ヒデオ  
何が

サトル  
北九州

ヒデオ  
嫌いよ

サトル  
好きなんだと思いますよ、この街が

ヒデオ  
好きになれる要素がない

サトル 好きははずですよ

ヒデオ そんなわけないやろ

サトル なるほど

ヒデオ ばかか

サトル 分かりました

ヒデオ なんや

サトル 僕はこの街が好きですから、この街を嫌いな人と意見が合うわけないです  
若い奴が、生意気やな

サトル 自分の住んでる街のこと、好きで何が悪いんですか、あなたこそかわいそ  
うですよ、自分の住んでる街の好きなどこひとつも言えないで

ヒデオ …お前は本当の馬鹿やな

サトル はい？

ヒデオ 最初に言ったやろ、水よ

サトル 水？

ヒデオ 北九州の水は世界一きれいでおいしいんよ、長いことカフェでもしよつた  
ら分かるよ

サトル え

ユイ お水ですか

ヒデオ わざわざ買わんでも、水道水沸かせば十分なんよ

ユイ …

ヒデオ 知らんかったやろ、バーカ

サトル

：

そこにヒデオの妻、エツコが現れる

ヒデオ

好きになつたり嫌いになつたりするにはな、そのものを知っておく義務があるんよ

エツコ

ちよ、ちよちよと、あんた

ヒデオ

何も知らんのに好きにも嫌いにもなつたらいかんのよ

エツコ

また営業中に出歩いて、バカ

ヒデオ

何十年も小倉の街を見てきたけどね

エツコ

また人様にご迷惑かけて、本当すいませんねえ、うちのが

ヒデオ

やっぱ好きになれんね

エツコ

このバカ、本当すいません

ユイ

あ、いえいえ

ヒデオ

やけど住んどるからには、向き合わんといけんのよ

エツコ

年をとつたらどうしてこうも説教好きなるんでしょねえ、気持ちの悪い

ユイ

ふふ

エツコ

うふふ、どうしたの

ユイ

でも、いいこと聞けました

ヒデオ

町づくりの金も全部ドブに捨ててきたような街やけどね

エツコ

え、ああ、水が世界一おいしいんだーって

ユイ

ふふ、ううん、色々

ユイ、サトルの方を向き

ユイ

ねえ、行こ

サトル

あ、うん

エツコ

本当すいませんでした

ユイ

いえいえ、こちらこそ、また小倉で

エツコ

その時はうちの店きて

ユイ

え

エツコ

カフェ、主人が好きな映画から名前をとったの

サトル

：映画

ヒデオ

魚町の連中は天狗になつとるからなあ

エツコ

うるさい。

不思議なことでもあるのかい？ 作 寺田剛史

【登場人物】

順子

母 順子の母

父 順子の父

母が数冊の本を抱えて立っている。

少し離れて娘の順子。

丁度3人が三角形になるようにして本を抱えた父が立っている。

母は振り返り、

母 景子です。

父 え？

順子 まさか。

父 景子って……。

母 みなさんお元気で。

父 うそだろ。

順子 待つて！

父 どうした！

順子 こんなに早く走れるわけない。

父 ああ。

順子 お父さんの大事な物捨てたりするわけがない。

父 確かに。だからどうしたって言うんだ。

順子 景子さんが！

父 なんだ。

順子 景子さんが！

父 景子さんがどうした！

順子 景子さんが！、景子さんが！お母さんに取り憑いてる！！

父 ええー！ー！ー！！

順子 間違いない！

父 そんなバカな！！

沈黙

父 お、おかあさん？

母 こんにちは。ご無沙汰します。お元気ですか？あれ、奥様は？

父 本当なのか、本当に景子さんなんか？

母 忘れてしまったんですか？

父 お、いや、覚えてます。でもかあさん……。  
母 今日は奥様は？  
順子 お母さんはあなたの中よ！  
父 中？  
順子 あ、いや外よ！  
父 外？  
母 私の中？外？ちよつと解らないんですけど。  
父 お母さんを貸せ！  
母 あたしに景子さんが取り憑いていたとしたらどうなの？  
父 おかあさん？  
母 違います。  
順子 お母さんを返して。  
母 まー、大きくなつてー。ねー。元気にしてた？覚えてる？小さい時に順子ちゃんおんぶしてよー散歩しよつたんよ。  
父 景子ちゃん？  
母 ちゃん？景子ちゃんて、あんた景子さんとやましい事でもあるんね、ええ！  
父 お母さん？  
母 違います。今は長崎で結婚してすね。久しぶりに帰つて来たらこの空襲でしょう、びつくりして。でも折角帰つて来たけ順子ちゃん元気しとるか  
父 なつち思つて来てみたんですけど。  
父 え、景子ちゃん？

母 ちゃんちゃんちゃんうつつるさいねー、やましい事でもあるんね。

順子 おかあさん？

母 違います。抱っこしたりおんぶしたりして。こんなちっちゃいのに、なんて言うんですか？満ちあふれてるって言うんですか？生きる…なんだろ…ふふふ。ニコニコしててくれるだけでこっちが元気になるっていうか。

父 やめろ！

母 違います。

母、ぶるぶる震えて

母 あわわわわ、あわわわわわ。

順子 待つて！よく見ておとうさん！景子さんはお母さんに取り憑いてきつと何か伝えたい事があるんよ。

父 伝えたい事？

順子 あたしにまかして！

母のぶるぶるは止まり。

順子 おか、あ

母 景子です。

順子 景子、さん…。

母 はい。

順子 なんかかあたし達に言いたい事があるん？

母 ある。

順子 聞かせてもらえますか？

母 そのつもりで来ておる。

順子 じゃあ、聞かせてもらえますか？

母 いいよ。

父 どう考えてもお母さんやろ。

母 本を捨てなさい。

父 何？

母 あなたの家にあふれている本を少し捨てなさい。そうすればお母さんを返してやろう。

順子 どうして？どうして本を捨てんとだめなん？

母 あふれかえって足の踏み場がないけやろーもん！

父 かあさんやないか！

母 違います。

父 もうばれとるわ！

母 そういうとこ、そういうとこよ、ちっちゃい男よあんたは本当に。

父 何！

母 と景子さんが言っています。

順子 本を捨てればいいん？

母  
そうです。

順子  
わかった、お父さんに少し捨てるように言ってみる。

母  
そうしなさい。

順子  
どう？帰って少し本捨てん？とくに蔵にある難しい本から捨ててみよ。

父  
あれは俺の宝物たい。

母  
あんたん宝物んはそんなペラッペラの紙切れの固まりか？

順子  
シヨック。

母  
どうしたのかい？娘。

順子  
宝物っち大事な物やん。それが本って。あたしお父さんの宝物はあたしやっ  
ち思っと思ったけ・・・。

父  
そらそうたい、一番の宝物っちゆったらそらお前だけたい。でも今の質問  
はそういう事じゃないやろが。

母  
あたしは！！！！

父  
何だ！

母  
あたしは宝物に入つとらんやないか！

父  
お前は景子さんやろーが！

母  
あたしは景子さんなの？

父  
いやいや聞かんで！つてやっぱり母さんやないか！

母  
景子です。

父  
なんなんかお前は。

母  
ううううう、あたしは家族じゃないんだ。

父

景子さんは家族じゃないわ！

母

あたしはあたしや！解つとるくせに！解つとるくせに！

順子

おとうさんひどい。

母

あたしと景子さんが解らんくなつとるううう。解つとるくせに！もうあた

順子

しはやつていけんばい。

父

ちよつとお、あやまりーよ。

父

え？

順子

あやまりー。

父

謝る？

母

謝って。

父

なかいか！

母

謝って。

順子

謝って。

父

どつちに。

順子

(母に) どつちにする？

母

お母さんに謝らせたいと景子さんが言っています。

順子

お母さんに謝って。

父

・・・ごめん。かあさん。

母

景子です。

父

なんなんかちゃーなんなんかつちゃー！かあさんが景子ちゃんか！景子ちゃんが母さんか！かあさんは母さんで、ああそうかかあさんはかあさんか。で景子ちゃんのかあさんで、お前は景子ちゃん？いやいやかあさんだろ。え？、かあさんか？いや景子ちゃんか？いやいやかあちゃんやろ。あああああ！！！もう！

父 母

私は景子ちゃんです。  
どっちなんか！

沈黙

母

家にあふれかえつとる本を少しでいいけ捨ててほしいつち言いよるんよ。

父

・ ・ ・ はじめから正直にそう言え。

母

と景子さんが言ったとしたらどうする？

父

よかろーがお前で。景子さんやなくて。お前が本を捨ててつち言えばよかろーが。

母

景子さんが言ったとしたらどうする？

父

言ったとしたら？えーと、景子ちゃんがいったとしたら、えーと、いや景子ちゃんも捨てんよ。

順子

じゃあお母さんが言ったとしたら。

父

考える。

母

私は景子です。

順子

(母に) お母さんを返して！

母

私は景子です。

順子

(母に) お母さんを返して！

沈黙

母 やっぱり私は景子さんじゃない！

父 なんだって？

母 さっきまでは景子さんやったけど今はもう違う。

父 ちよつともうどういふことか。

順子

解った！さっきまではお母さんやったけど、でも景子さんで。今はお母さ

んでも景子さんでもない。そやろ？

母 そう。

父 ほんならお前はいつたい誰なんか。

母 解らない。

父

お母さんやろが！

母

おかあさんなんかもね。そうなんかもしれん。

順子

もう今となつたら誰にも解らん。お母さんなんかもしれんし景子さんなん

かもしれんしそれ以外の何者かなのかも。

父 恐いことゆうなよ。でもそこにおるやんか！

母

おるのか・・・おらんのか・・・。

父

なんじゃそら！おるやろ！

母

呼んでみて下さいよ。

父

何？

母 私を呼んで。

順子 おかあさん。

母 はい。

父 返事しとるやないか！

順子 景子さん。

母 はい。

父 二人おるやないか！

母 もう、いったい私は誰なん？ねえ誰なん？

父 してるか！

母 はい、いなくなりました。

父 は？なんだこれは、夢か？

母 夢かどうか確かめるには寝てみるんがいんやないやか。

順子 そうや！

母 寝よ。

母、その場に寝転ぶ。順子も転ぶ。

母 見てあそこ。

順子 何、景子さん。

母 いいえ私は誰でもないわ。

父 なんが始まるんかこれは。

母 見て、あの雲。

順子 ああ、それで？何か不思議な事でもあるの？

父 あるわ！

母 あの雲のように少しずつ形を変えて、いつか消えて無くなってしまっただわ私たち。

父 どうした？

順子 そうね、景子さん。いつかは消えてなくなってしまうんだわ私たち。

母 私は景子さんではないわよ。

母・順子 せつないわねー。

父 お母さんだろ？

母 景子です。

父 景子さんか？

母 おかあさんです。

父も寝転ぶ。

父 どれか？

母 なんか。

父 雲たい！

順子 ほらあそこ。

父 どれか。

順子 さつきとはずいぶん形が違つとる。

父 あれか？

母 ほら、解らん。

父 どれか、あれか、それともあれか。

順子 あれっちゃ。

父 ああ、今は解る。あれやろ。(指差して)

母 見ときーや、ちゃんと。

順子 ほら、変わつてく。変わつてくでしょ？

父 ああ、変わつてる。変わつてく。

順子 もうすぐ消えちゃう。

父 なあ、

母 何？

父 あの雲が消えてなくなる前に、お母さんだと言つてくれ。

母 捨ててくれるんね？

父 なんを？

母 本。

父 やだ。

順子 捨てんつてよ。

母 あたしは景子です。

父 なんなんだよー！

父 起き上がり。本を投げ捨てまた寝転ぶ。

父 まだ消えとらんやろ。

順子 また少し形を変えたね。

父 そうか？

母 私は誰ですか？

父 おかあさんやろ。

母 いいえ私は・・・

父 お母さんに、順子たい。

母 違います、私は・・・

父 お母さんたい！！

順子 あっ！

母 何？

順子 雲と雲がくつついた。

母 ほんとだ。

順子 大きくなつたね。

父 帰ろう。

順子 あそこの小さな雲もくつつけばいいのに。

母 そうね、消えちゃう前にね。

ヨシモト流

作 寺田剛史

【登場人物】

従業員 田中 男  
従業員 谷本 男  
従業員 吉田 女

田中 おもちゃ的な事だよな。

谷本 でも子供にも好かれる為にとって事は一旦離れた方がいいんじゃないか？

田中 だってお前、子供に好かれるって事はもうそれは売れるって事だろ？

谷本 そうなの？

田中 そうだろ。

谷本 まあそれは解るけど、味は変えずに駄菓子感覚でってなかなか難しいだろ。

田中 お菓子はお菓子だろだって。

谷本 解った！

田中 なに。

谷本 味はそのままに、これ自体がおもちゃになっただけでいいんだよ。

田中 例えば？

谷本

例えばこれが船になるとか。風呂場で遊べる。

田中

重たくて沈んじゃうよ。それならこんにゃくでも出来そう。

谷本

こんにゃく味ないだろ。

田中

ないよ。

谷本

お風呂でしこたま遊んだ後に、皆で楽しかったねっていつて食べるんだよ。

田中

食べるか？風呂場で遊んで、皆の体の垢がびっしり付いたもん包丁で薄く

切って、爪楊枝でさして、パツクって、あーおいしいって。食うか？

谷本

食べないな。

田中

食べないよ。汚いよ。

谷本

もー！じゃあどうすんだよ！もう一ヶ月もこーやって深夜会議だろ。

田中

お前あきらめんなよ。

谷本

諦めないけど、何にも話進まないし、決まらないし。だって、もう味で

田中

勝負したいだろそんなの。でも売れないし、なんなんだよもー！

田中

まあ落ち着け。だめだって、嫌々やっても良いアイデアなんて出てくるわ

けないだろ。楽しも。楽しんでやろう。

谷本

ほんとお前は前向きだな。羨ましいよ。

田中

形だよ、この形を変えようよ。

谷本

型たつて、これが切りやすし、作る過程でこれにしかならないだろ。

田中

この四角がワクワクしないんだよ。もっとわくわくしようぜ。

谷本

しろよ、ワクワクでもワキワキでも。

田中

ワキワキ？

谷本 え？

田中 ワクワクは解るんだけど、ワキワキってどういう事？

谷本 言いよもう。

田中 いや待って。

谷本 何。

田中 ワキワキが気になる。

谷本 いいってもう。

田中 間違えたの？

谷本 は？

田中 間違えたんだよね。

谷本 間違えたってなによ。

田中 ワクワクだけで良かったのに、ワキワキ付け足した事後悔してるよね。

谷本 してないよ。

田中 素直に言えばいいのに。

谷本 いいよもう。で、例えば？

田中 あ！色か！色を変えよう！

谷本 形どこいったんだよー！

田中 色と形だ！

谷本 で？

田中 目立つ色。

谷本 なに、青？

田中 谷本 田中 谷本

金。

白！

白は味がしなさそう。

じゃあ、もう赤とか。

赤いねー。目立つ。

形は？丸？

そんな簡単な形じゃなくて複雑な形がいい。

星？

かわいい。

ハート。

かわいいかわいい。

えーと。

船！

いいねー！ほらやっぱり船だー。

垢だらけだから。

赤色だけにね。

・・・たのし？

うん、まあ。

はあ・・・。

ダメだ・・・。

思いつかない。

谷本 赤、赤、赤……。

二人 若戸大橋！

谷本 いいねー。

田中 複雑過ぎるだろ。

谷本 でもおまえ、これが赤で、若戸大橋の形してて売ってたらおまえどうする  
田中 まあ、ちよつと見るわな。

谷本 んで？

田中 みて、フーンって言つてえー。

谷本 言つて？

田中 それだけ？

谷本 買えよ！

田中 買わないなー。やっぱ形とか色とかじゃないよ。

谷本 じゃ何よ。

田中 これ一個で2つの事が出来る優れものつて事でどうだろう？

谷本 例えば？

田中 和菓子として食べれて、糊としても使える。

谷本 海苔？

田中 食べない方の糊。

谷本 何で？

田中 べたべたするから。

谷本 のりはのりでいいだろ。

田中 それをいっちゃおしまいよ。

谷本 食べられるのり。

田中 それそのまま海苔だよね。

谷本 そのままのりって？

田中 だつてのり食べられるし。

谷本 だからその海苔じゃなくて、え、どっちののりのこと？

田中 だから食べられるのり。

谷本 それは、パリパリの方の？

田中 パリパリってどゆこと？ワキワキと関係ある？

谷本 無いよ！

田中 あ！これをさ、壁にバーン！！て叩き付けるってのは？

谷本 は？

田中 気持ちいいぞー。壁にバーンってなって、ぐちゃー！ってなって。ストレス

解消になる。

谷本 食べ物！

田中 だから食べ物だけどそれに捕らわれているからいいアイデアでてこないんだよ。

谷本 じゃなにか？食べないのか？

田中 食べない。

谷本 いやおかしいよね。

田中 おかしいね。

吉田がくる

田中と谷本、ビックリする

田中 え、何！いたの？

谷本 いやそりゃいるよ。

吉田 . . .

田中 無視ですか。

吉田、ある方向へ合掌。

谷本 でもほら、ちゃんとやってくれてるよ。

田中 うん、ありがとう！。

吉田頷き、二人の間に座る。

谷本 なに、聞くの？

吉田 (頷く)

田中 あそう。

吉田 (頷く)

谷本 いいけど。

吉田羊羹を取り出して食べる

田中 このさ、まって、吉田さんちょっと貸して。(吉田の羊羹を取って) この

食べかけのさ、歯形のとこってさ何かいいよね。

谷本 あーわかる、このね、ここのところね。

田中 見て、吉田さんの歯形これでしょ。そこに、俺の歯形が付くと(食べよう

として)

吉田 きゃ!

田中 え、なに?

吉田は羊羹を持って田中から離れる

谷本 いやらしいんだよ、お前は、どさくさにまぎれて吉田さんの食べたところ

食べようとして、変態!

田中 待てよ!そんなんじゃないだろ!

吉田は田中を、いやらしい目で見ている。

田中 まってよ、そんなんじゃないし。

吉田 変態

田中 えーちよっと待ってよー。

田中 俺は、この羊羹に何かもうひとつのいいところ？お得なところを考えようとしてんの！

谷本 それで吉田さんの歯形っておかしいだろ。

田中 いや、別に歯形を付けて売りたい訳じゃなくて、歯形がつくよね、羊羹にとって事がいいいの！

谷本 お前さ、真面目にやれよ。このまま売れなかったら本当にここつぶれちゃうよ。わかってるよ、だからこうやって考えてるんだろ？

田中 ここ無くなったら俺たち行くとこないんだよ、それなのになんだよ、もうちよつとちゃんと考えろよ。

田中 考えてるのに。

吉田、自分がかんだ所とは反対側を田中に差し出す。

吉田 こっち側だったらいいですけど。

田中 いらナイよ！

谷本 あ、ヤバイ今何時？（時計を見て）もう6時か、そと明るくなって来たな。今日はこの辺でお開きだな。

吉田は羊羹に指でアナを開けてその穴から時計を見ている。

谷本 なにしてんの？

吉田 今、6時7分です。

田中 なんで羊糞の穴から時計見てんのかな。羊糞にいちいち穴開けて。

吉田、羊糞に開けた穴に指を出し入れする。

田中 やめて吉田さん（止めに行く）。

吉田 きゃ。

田中 きゃじゃないよ、やめて。

田中 やめる。

谷本 なにしてんのよもー。ほらほら、来ちゃうよ、行こう。

田中 本当だ、いこ。

吉田 はいはい。

2人去ろうとして

吉田 ちょっとお二人。

田中・谷本 なに？

吉田 ちょっとこれ使ってみて下さいよ。

谷本 え、どゆこと？

吉田、羊羹の穴に指を出し入れしながら、

吉田  
これ、これで、こうやって。

田中  
吉田。

吉田  
ハイ！

谷本  
ハイ！じゃなくて。

吉田  
使ってみてくれないかなあ。べたべたしちゃうか。

田中  
急にしゃべりだしたかと思ったら何を言いだすんだよあんたは。

吉田  
売れないかあ。

田中  
売れないよ！

谷本  
待って、でも売れるかも。

田中  
売れないよ！え、買うの？

谷本  
だって買ってでもあくまでも羊羹を買うんだし。

田中  
そうか・・・。

谷本  
だから形ももつと長方形の方がいいか。

田中  
いや、円柱の方が持ちやすいかも。

吉田  
変態！

3人笑う

3人去りながら

吉田 やってみて下さいよマジで。

田中 やだよ！

吉田 えー、だってあたし使えないですもん。

田中 やめろ！

吉田 無いから。

谷本 やめてよもー。

吉田 待って、だったらこんにやくの方がいいか。

田中 こんにやく味無いよ。

谷本 それ俺が言った。

吉田 味は関係ないんじゃないですか？

田中 味関係あります。

谷本 味で勝負した方がいいって俺言ったよね。

吉田 ふーん。

谷本 なにふーんって。

# 隠し砦の三女子高生

作 脇内圭介

## 【登場人物】

朝子……小倉西高等学校2年生。

さち……右に同じ。

ともえ……右に同じ。

ゴボウ（後藤君）……小倉高等学校2年生野球部。

昭和30年夏の昼下がり。雲ひとつない晴天の下、小倉北区にある豊楽園球場の客席が太陽によって熱せられている。ぼつぼつと人が入ってきて、思い思いの席に座っていく。そこに夏服の小倉西高生の女子が三人現れた。それぞれが学校指定のバッグを手にしている。

さち ぼちぼちいるわね

朝子 そうねーまだ4時間もあるのに

ともえ すごい

朝子 あのおじさん、飲んでる

さち やーんまだお昼よ

朝子 早く死ぬわね

さち やめなさい

朝子 お酒のどがいいのかね

さち さあ。ここでいいわよね？

朝子 どこでもいいわよ

ともえ (二人よりも少し後ろの席の前で) ここ、ここがいい

さち うんうん。ここならベンチも綺麗に見えそう (ベンチに座り) あっつ

朝子 (さちの隣に座り) あちつ。見えないわよ、真正面だけど遠いわ

ともえ いいの、ここにしましょう

朝子 気狂いしてるわねー

ともえ 好きだけよ

さち まあ、みんな狂うほど好きよね

朝子 私は違うわよ

ともえ えウソ

さち ウソつき。この前且過に行ったとき、いたー！って大興奮してたの誰よ

朝子 誰それ

さち あんたよ

ともえ え、いたの？且過に？

さち いやね、私は見てないんだけど、朝子が、いたー！ちよつと待ってーこつ

ち向いてーって叫ぶもんだから、私恥ずかしくって下向いちやっつ

ともえ

朝子、いたの？

朝子

いたのよ、だけどそんな叫んでもないし、興奮なんてするもんか、みつともない

さち

みつともなくなつてたのよ

ともえ

旦那で何してたのかしら・・・

朝子

そんなの決まつてるじゃないの。クジラよ

ともえ

クジラ？

朝子

クジラを買いに来た以外に考えられないじゃない

ともえ

なにそれ

朝子

強くなるために体作んなきゃいけないわけでしょ？自分の体に入るものは自分の目で見え買うつてのがポリシーだったりするんだわ。それでクジラを買つてたのよ

さち

なんでクジラ限定なの、旦那には筋肉になりそうなもの沢山あるじゃない

朝子

ばかなの？

さち

はあ？

朝子

あんたら小倉っ子でしょ？私らの丈夫な体は何でできてんの？ねえ、何で

ともえ

できてんのともえ

朝子

え、あ、お母さん

ともえ

クジラよ！小倉っ子は旦那のクジラをいっぱい食べとるから丈夫なんや

朝子

ろ！ばっかやねー

さち

いやいやいや

さち

いやいやいや

ともえ  
クジラは関係ないと思う

朝子  
はー呆れた

さち  
なに

朝子  
あんたたち、ちゃんと授業聞いてるの？

さち  
なに

ともえ  
聞いてるよ

朝子  
林先生言ってたでしょ、体に入れた食物が体の細胞ひとつひとつになるって

さち  
ああ

ともえ  
それは言ってたけど

朝子  
じゃあわかるでしょ。力のある生き物クジラ。原様が食べる。強くなる

さち  
原様？

朝子  
げ

さち  
今、原様って言ったわよね

ともえ  
私も聞いた

朝子  
はあ・・・？原様って、みんな呼ぶでしょうが

さち  
呼ばないわよ

ともえ  
さすがにね・・・様はつけない

さち  
あんたが一番気狂いしてるんじゃないの？

ともえ、遠くにあるベンチを見て。

ともえ あ！原選手？きゃー

さち あ！

朝子 え、原様！原様ー！きゃーこっち向いてーやーん！こっちこっちー

朝子、ベンチに向かつてすごい勢いで手を振っている。  
その様子をさち、ともえは黙って見ている。  
朝子、二人の視線に気づき、動きが止まる。

朝子

さち ・ ・ ・

ともえ うん、一緒に応援しよ？ね？

朝子 ・ ・ ・そうね。原様ー！原様ー！

さち ほら、ともえもしっかり手振りなさいよ

ともえ やだ、できないよー

さち できるでさる

ともえ 恥ずかしいー

さち ほら横を見て！こっちの方が恥ずかしい

ともえ うーん、もー

ともえ、恥ずかしそうにベンチに向かつて手を振る。

ともえ

きゃ!

さち

あ、返した

ともえ

どうしよ、どうしよ

さち

ほら、もつと振りなよ

ともえ

あ、みてる、みてるー

朝子

あれ、違うわ

ともえ

え

朝子

あれ、原様じゃない

ともえ

え

朝子

あれ、ゴボウよ。後藤君

ともえ

ゴボウ?ゴボウ君?

さち

え、ゴボウ?あ!後藤!いや、しらないな

朝子

そりゃそうよ、後藤はベンチのゴボウよ、わたしんちの近所の

さち

え、うそ

朝子

体格が全然違うもの、まさにゴボウ。ほら、背番号も

ともえ

あ・・・

朝子

あれでも小倉高校野球部だもんなー

ともえ

え、じゃああれも甲子園に行ったの?

朝子

そうよ。ベンチを暖めるだけ暖めて、優勝が決まった瞬間に初めてグラウンド踏んだ。そんな惨めなゴボウだわ

さち

やめなよもう

朝子　　なんで

さち　　なんか・・・かわいいそうよ

朝子　　そう？

ともえ　　そうよね、ごめん

さち　　いや、私は別に

ともえ　　あーあ、原選手・・・

朝子　　なんか疲れた

ともえ　　はあ・・・

さち　　んーじゃあまだ時間あるし、お弁当タイムにしましょつか！ね？

ともえ　　うん

朝子　　そうよわたし、お腹すいてたんだった

さち　　ね？それもあつて早く来たんだから

朝子　　クジラ弁当クジラ弁当！

3人、バックを開け、弁当を探す。

さち、ともえは弁当袋を取り出す。

さち　　朝子どうしたの？

朝子　　クジラ弁当・・・

さち　　まさかないの？

朝子　　うん・・・

さち えーどうすんの？

朝子 あ！思い出した！玄関だ。あー私のクジラ弁当がー

ともえ じゃあ、これあげるよ

朝子 え、いいの？クジラは？

ともえ 入ってないけど、あんまりお腹すいてないし

朝子 え、全部？

さち 全部じゃないでしょ

ともえ うん、全部

さち あら

朝子 じゃあ遠慮なく

ともえ お箸も使って

朝子 お箸はあるわ

さち なんでよ

ともえ、朝子に弁当を渡す。

朝子、さちはお弁当箱を開く。

朝子 あ！あ！なんてこった！

ともえ え？

朝子 ちよつと、さち！さち！

さち なによ

朝子

これ、これ！

さち、朝子が手にした弁当の中身を見る。

さち

わ！え、なにこれ！

朝子

許すまじ

さち

うん、そうね

ともえ

え、うそ・・・あ！

朝子

(弁当の中身を見せつつ) 抜け駆けとはいい度胸だな、え？

ともえ

・・・

朝子

こんな弁当、いつ渡すつもりだったんですかね？

さち

ともえ、渡しちゃったあんたが悪い

ともえ

・・・

朝子

「原選手ファイト」か、へっ。沢庵なんかでよくも器用に

さち

ハートは、福神漬けとめんたいこでねーなるほど

朝子

福神漬けとめんたいこ？

ともえ

本当にごめんなさい。2人にはちゃんと伝えてから渡すつもりで

朝子

許せない

朝子、ともえの弁当を投げようとする。

さち、朝子を止める。

ともえ

きゃあ！

さち

朝子！それは

朝子

なんで止めるの！

さち

ともえがかわいそうよ

朝子

原様の方がかわいそうよ！

ともえ

え

さち

ん？ん？

朝子

こんなの食べたら、原様死んじゃうじゃない！

ともえ

やだ！

さち

なに言ってるの

朝子

この弁当、食べるところないじゃないの！

ともえ

そんな・・・

さち

いくらなんでもひどいわよ

朝子

沢庵、福神漬け、めんたいこ！寒気がする！

ともえ

漬物好きだっけうわさで

朝子

はあ？原様が？それなら浅漬け入れなさいよ！

ともえ

浅漬け？

さち

そういうこと？

朝子

当たり前でしょ！こんな漬物食べて体壊したりしたらどうすんの。あんた責任取れる？

さち ちよつと大げさ

朝子 うわー出たー学生の本分忘れてる女子高生、一号二号ー

さち なんなの？

朝子 やっぱりあんたたち授業聞いてない！全部、食品添加物！てんこもり！

ともえ 食品添加物

朝子 毒々しい色に染まったかわいそうな野菜や魚卵たち。原様が食べたらどれ

だけの健康被害が出るか・・・

ともえ 大丈夫よ、そんなすぐに出るもんじゃないんでしょ？

朝子 それが甘いのよ！どんどん蓄積して体を蝕んでいくんだから。原様はきつ

とプロ野球選手になるお方よ。そんな未来のあるお方の選手生命を縮める

なんてことしたら、野球の神様からの天罰を賜ることになるわ。だからわ

たしがそうなる前に止めてあげてるんじゃない

さち そうですか・・・

朝子 わたし、栄養学を学ぶために大学に行くことにしたの

ともえ ほう

さち はあ

朝子 そして将来的にはこの世から食品添加物を根絶やしにして、あんたみたいな  
なおろかな人間が根幹から現れない世界を作るの。これは原様のためだけ  
じゃなく、全人類のためでもあるのよ！

さち、ともえは思わず拍手してしまふ。

ともえ  
朝子  
ともえ  
わたし、浅はかな弁当を作ってしまったのかもしれない  
いいのよ  
こんなものは・・・

ともえ、弁当の上に乗った部分だけを食べ始める。

朝子  
ああ

ともえ  
(少し泣いている) ごめんなさい、ごめんなさい

さち  
見てられない

朝子  
あんたが早死にしちゃうわよ

ともえ  
いいの、これは戒めなの

朝子  
そう・・・

さち  
朝子のせいよ、これ

朝子  
は？私は原様のために

ともえ  
見て、沢庵全部食べちゃった。なんか、原選手を食べた気分

朝子  
やだ

さち  
ハートだけ残ると不気味ね

さつきまでベンチの方にいたゴボウが客席の上から駆け寄ってくる。

ゴボウ よつす

さち あ

朝子 え、なにゴボウ。ベンチ暖めてたんじゃないの？

ゴボウ 冗談きついなー

ともえ ゴボウだ

ゴボウ 後藤です

ともえ ゴボウ

ゴボウ ああ、はい

朝子 なに？

ゴボウ いや朝子ちゃんさ、手振ってくれるの嬉しいけど恥ずかしいけやめてよ

ねー

朝子 うん、わたしも恥ずかしかった

ゴボウ ん？

朝子 大丈夫、もう絶対あんたなんか手振らないから

ゴボウ そうか、うん

ゴボウ、さちに向かって手を伸ばしている。

さち ・・・え

ゴボウ ありがとう

朝子 この子は手振ってないわよ

ゴボウ うん

さち ・ ・ ・ なによ

ゴボウ え、お弁当は？

さち お弁当？

朝子 え

ともえ お弁当って

ゴボウ え、無いの？

さち なにそれ

ゴボウ この前言ったじゃん、作ってくれるって

朝子 え、どういうこと？

ともえ 知り合い？

ゴボウ え、知らないの？

さち、ゴボウの手を引き、少しはなれたところに行く。

朝子 え、え、え

ともえ もしかして、もしかしてなの？

朝子 ありえない

朝子、ともえはさちとゴボウの会話に聞き耳を立てる。

さち　　なんでこんなところ来てんのよ！

ゴボウ　　だって

さち　　内緒にしてるのに

ゴボウ　　え、そうなの？

さち　　もー

ゴボウ　　あーごめん

さち　　弁当ってなに？

ゴボウ　　ほらこの前、作って来てくれるって

さち　　あ！

ゴボウ　　忘れてた？

さち　　・・・ごめん

ゴボウ　　そっか、いや、いいよ、どうせ試合には出ないだろうし

さち　　わたしのでよかったら・・・あるよ

ゴボウ　　いいって、大丈夫大丈夫

　　ともえ、ハートだけが残った弁当箱を渡す。

ともえ

これでしょ？

さち　　え？

朝子　　もーさちったら、ちゃんと用意してんの

ゴボウ　　え、それ俺の？

朝子 さち、恥ずかしがってんのよ

ゴボウ そうなんだ

さち いや、それは

ゴボウ (弁当を受け取り) なんだよーありがとう！

さち え、ああ

ゴボウ そろそろ集合時間やけ、控え室戻って頂いちゃうね

さち ああ

ゴボウ、弁当箱と箸を持って小走りで行った。

さち ・・・あのさ

朝子 よかったね

さち よかった？え、さっきまで添加物がどうこう言ってたくせに、後藤にはあれ渡すってどうなの。確かにベンチよ、後藤は。ギリギリベンチに入れてるくらいの男よ。でもさ、なに？その程度のヤツなら添加物の弁当でもかまわないってそう言いたいのか？ねえ

ともえ ・・・なんなの

さち は？

ともえ いいじゃない喜んでたんだから！私なんて渡せてもないのよ！

さち 自分で諦めたんじゃない

ともえ 今日のところは、よ！なんなの？お付き合いしてるの黙ってたくせに

さち  
いろいろ騒がれるから

ともえ  
私たちには言ってくれても良かったじゃない！私はそれすら目をつぶって、さちのためにつて、ほんとなら私が！私が！原選手に渡したかったお弁当をさ！くそつ！

さち  
余計なお世話よ！

ともえ  
言ったわね！

朝子  
（ベンチの方を見て）ほら！ベンチの方見て！

ゴボウは、すでにベンチに戻っていて、空になった弁当箱を掲げ、大きく手を振っている。

ともえ  
ゴボウだ

さち  
やだあ恥ずかしい

ともえ  
もう食べちゃったの？

さち  
そうみたい

朝子  
添加物つて、有毒じゃないのかもしれないわ

ともえ  
私のお弁当箱、飛んで行きそう

さち、ゴボウに向かって思いっきり手を振って返した。

# 冷めたカレーライス

作 脇内圭介

## 【登場人物】

西島・・・背広の仕立て屋を営業する社長。幼い頃左足を不自由に。

佐伯・・・仕立て屋の従業員。

玉井・・・仕立て屋の営業。

玉井の嫁

昭和40年の夏の終盤、外では辺りが暗くなっていくのをセミの鳴き声が知らせている。

小倉区青葉町にある二階建て長屋の一階の一室、8畳ほどの部屋に長机がひとつあり、一台の扇風機が回っている。

長机の周りには下手から西島、佐伯、玉井、玉井の妻の順に座っていて、長机にはライスカレーが4皿置いてあり、それぞれにスプーン、麦茶が入ったコップもある。コップには水滴がしたたっており、西島の辺りには丸い水滴の跡が机のあちこちについている。

一方、他の3人のコップは置かれてから動いた気配がなく、周りには水滴で水溜りが出来ている。

西島はライスカレーを急がしく食べていて、佐伯はルーだけをゆつくりと口に運んでいる。

玉井、玉井の嫁は一口も手をつけておらず、じっと西島の方を向いて正座している。

西島 (ライスカレーを食べながら) 佐伯くん

佐伯 (すこし驚いて) はい

西島 え、はいって

佐伯 はい？

西島 はいって佐伯くん、はいとか言ってたっけ

佐伯 あはは、なに言ってるんですか

西島 えーですかって何よ、気持ち悪い

佐伯 え、そうやか、そんなことないよ

西島 やだなーよそよそしいのは。ウチじゃあご法度よ

佐伯 うんうん、うん分かつとるよ。え、なに

西島 なにって

佐伯 え、佐伯くんって

西島 ああ、そっか、急に、はいとか言うけ

佐伯 ああ、ごめん

西島 あのさ、東海林太郎(しょうじたらう)さん知つとる？

佐伯 知つとるよ、歌好きやけ

西島 そっかー

佐伯 そっかーってなん

西島 いやーごめん

佐伯 えーなん

西島 うふふ、今日ねこの後、月世界行くんやけどね

佐伯 あ、またキャバレー

西島 いや、あれよ、ぼくは女の人に会いたいっちわけやないんよ、友達に誘われとるけ一緒に行くだけよ

佐伯 はいはい

西島 ほんとやけ

佐伯 で

西島 あ、でよ、今日巡業で、東海林太郎（しょうじたろう）さんが来るんち

佐伯 え！ほんとに

西島 いいやろー

佐伯 え、うらやましい！てことは見るんでしょ、聴くんでは、ナマ東海林太郎（しょうじたろう）

西島 そうよー見るよ聴くよー、で、佐伯も良かったらたまには一緒に行かんかなーって

佐伯 え、いいんですか

西島 うん、いっつも仕入れとかがんばってくれよるけね

佐伯 あっ

西島 ん? どうした

佐伯 いやーあの、なんといいますやら

西島 やら?

佐伯 あ、今日は、ごめんなさい、そうだ、用事があります。そう、両親が小倉に來てるんです

西島 え、そうなんね

佐伯 はい、やけ、ごめんなさい

西島 そうかー残念

佐伯 残念です

西島 あ、やけなんか緊張しとるんね

佐伯 え、あ、そうなんよー

西島 あはは、どんなご両親か知らんけど緊張しすぎやろ、どうしたん、(佐伯のライスカレーの皿を指差し) それ

佐伯 え、うわ

西島 もうほとんどないやん

佐伯 いや、こうやって、わけて食べる方やけ

西島 そうだっけ

佐伯 そうだつて、その方がおいしいし

西島 えーでもさ、そっち先に飲んでしまったらさ、飲むって言うんかな? いや

西島 どっちでもいいけどさ、それ先に無くなったら味気ないやんか

佐伯 いや、これがいいんよ、一個一個こなすつちゅうか、ほら、スーツもさ、

一個一個順番に工程こなして作るやん？それと一緒

一緒かな？

佐伯 一緒よ。寸方採るのがルーで、仕上げがライス、ね？スーツで言ったら仕上げは西島さんやろ。一番大事なところ、やけ、大事なのはライスなんよ

うーん

佐伯 やけ、西島さんが一番大事ってこと、やけライスよ

西島 いやいや全部大事よ。今、どっちの話しよんかね？

え、あれ

西島 いいけどさ、どっちにしたってどれも大事よ、スーツもライスカレーも。

どれも欠けたら成立せんのやけ

佐伯 西島さん。あの、やっぱり、生地も大事よね？

西島 やけそーいいいよるやん。生地も、針も、糸も、従業員も全部大事よ

佐伯 そうよね

西島 よしよしよし

西島、急に佐伯の頭を犬を愛でるように撫で回す。

佐伯 やめろ！

西島 (止まる) あ、ごめん、ごめん、あはは

佐伯 いや、違うんです、すいません

西島 いや、(手を匂い) うわ、汗くさー  
佐伯 はい臭いんです  
西島 うそうそ、うそよ、いい匂い  
佐伯 ちよつと・・・すみません

佐伯、後ろを向きうつむいている。

西島 ごめんごめん、そんなつもりなかったんやけど  
佐伯 いや、ほんと、違うんで  
西島 そう・・・？ほんと気にせんで、ね？あ、冷めるよ？(玉井、玉井の妻に)  
君たちも

玉井  
玉井の妻  
西島 あ、そうそう、あれ、誰がとつたんかね？

佐伯、玉井、玉井の妻はビクツと身を硬直させた。

西島 あ、ごめん、(玉井に) 君のことじゃなく  
佐伯 ・・・え、とつた・・・？  
西島 うん、あんないっぱいとつたらいかんよねー佐伯  
玉井 ・・・

佐伯 はい

西島 あ、またはいって。ダメだつてー

佐伯 いや、あの、なんで知ってるんですか？

西島 また敬語

佐伯 だれから聞いたんですか

西島 え、誰だっけ？村上千だっけな

佐伯 なんで村上が

西島 わかんない。ここにさ、いっぱい置いてあつたらしいんよ

佐伯 え、ほんとですか？戻ってきた？？え、なんで

西島 いやいや、新規よ、え、佐伯、読売新聞さんよ

佐伯 読売新聞さん？え、犯人が？

西島 犯人つて。佐伯くん失礼だよ、あ、まあでも取りようによっては犯人つて  
表現もできるか

佐伯 いや犯人やけ。じゃないとしても容疑者や。警察には言った？

西島 いやいやお客さん捕まえてどうすんの、ははは

佐伯 いや、そういうところはちゃんとしないと

西島 まあ気持ちはわかるよ、休み減るもんね

佐伯 おれたちは何もしないでしょ、全部警察がしてくれるでしょ

西島 え、警察はスーツ作るとこじゃないよ、あはは

佐伯 何言いよん

西島 え、今佐伯くんそう言ったやん

佐伯 言つとらんよ

西島 従業員増やせてこと？まあ増やしたいけどね

佐伯 ・ ・ ・ やつぱり、そうよね

ん？

・ ・ ・

西島 まあ従業員は増やせんけど、ぼくたちみんなでがんばろうね

佐伯 でもおれはもう ・ ・ ・

西島 120着

佐伯 ・ ・ ・ 取られたのが？

西島 いや取ったのが

佐伯 取った？

西島 注文を120着もよ。いやー一着4、5日のペースで作ったって1年かけても

作りきれんよ

佐伯 え、あ

西島 しかし新聞社さんは太いけ、これからも大事に取引していかんとね

佐伯 うん ・ ・ ・

西島 まあ稼げるときに稼がななーがんばろ、な

佐伯 がんばれるかなー

西島 どうした佐伯くん、いつものやる気は何処行つた

佐伯 それが ・ ・ ・

西島 ははは、そんな日もあるか。ほんとだれかね？こんな一気に注文とつたの

佐伯  
・  
・  
・

西島はライスカレーを食べ終わり、麦茶を飲みだす。

佐伯はルーがなくなったライスカレーのライスところだけを食べているが、とても遅い。

西島 玉井くん、と、奥さんよね？

玉井 妻

はい

西島 とりあえず、冷えちゃうから食べな？

玉井、玉井の妻、やはり一口も口にしない。

佐伯 体調、悪い？奥さんも大丈夫ですか

玉井 妻

お気遣い無く

佐伯 はあ……

西島 今日の当番の村上くんが作ったライスカレー。うまいんやけどなあ

佐伯 玉井好きやん、村上のカレー

玉井 妻

玉井、玉井の妻、顔を見合わせて、正座のまま後ろに一步下がり、土下座した。

佐伯  
え

西島  
佐伯くん（別の部屋に行つていいぞと合図を送る）

玉井  
本当にすみませんでした！

妻  
この度は主人が大変なご迷惑をおかけしてしまい、本当に申し訳ございません

玉井  
社長。もう絶対にいたしません。どうか、どうか、まだここにいさせてください！

妻  
お願いします。夫はここを出てしまつたら、他に行くところがございません。主人は大変反省しています、それは私が保証いたします。どうか、お願いいたします！

西島  
申し訳ありませんが、奥さん。玉井くんはもう2回目なんです、申し訳ないけれども

妻  
わかつております！しかし、夫は3度目は絶対にいたしません。金輪際、おろかなことは誓つて、誓つていたしません。どうかお願いいたします！  
しかしね

西島  
玉井  
本当です。俺、もう心を入れ替えました！これから先、決してあんなことはしません。営業もこれまで以上に頑張ります。注文もたくさん取ってきます

西島 いやね、もう注文はいいし、営業は次は佐伯くんに任そうと思ってるしね  
佐伯 え？おれ？したことないよ、営業とか！

西島 佐伯くんなら出来るよ、運転うまいし

玉井 ダメですこいつは。佐伯は運転がうまいだけで生地取ってくるしか脳の無  
いやつです

佐伯 言うねえ・・・

西島 そうかもね

佐伯 わ

玉井 営業は絶対に誰にも負けません

西島 玉井くんの能力は買うよ。でもね、あ、ちよつと奥さん。その首飾りなんね

妻 あ、いや

玉井 お前！

西島 それ、随分高そうやねー

玉井 いや、これは

西島 それね、この前井筒屋さんに行ったときに同じのたまたま見たんよ、きれ

いよねーどうしたんそれ

妻 ・・・はい

玉井 本当にすみません、これ、明日には質に入れてきます

妻 え

玉井 えじゃねえんだよ！お前なんでそれして来てんだ、馬鹿やろう！

玉井、妻を殴る。

佐伯

おい玉井！

西島

おい！会社の金取ったあげく自分の女房にそんなくだらん首輪買って飼いならして、暴力まで振るうんか！ふざけるな！

西島、激昂し、立ち上がって玉井に詰め寄ろうとするが、

左足が不自由なためころんでしまう。それでも立ち上がり、詰め寄るため佐伯がそれを制す。

玉井の妻は、泣きながら玉井の足元にしがみついている。

佐伯

西島さん！

妻

すみませんでした、すみませんでした

西島

ちっちゃいときこんな足なつて、絶望して、やっとの思いで仕立て屋なつて、みんながむしゃらに働いて働いて稼いだ金を、そんなちゃんもんに換えて、お前、お前許されると思つとるんか！

玉井

ですから、お金も全部返しますから、お願いします！

西島

金返せばいいってもんやないやろ。俺や佐伯や村上らみんなががんばって稼いだわけやろ、みんなの金やろ？お前がきつちり100万返したってそれはもう、違う金だろうが

佐伯

え、100万、え

玉井　　・・・はい  
西島　やけ、もうお前は、いらん  
妻　　これ、これ売りますから  
西島　聞いてたかな？奥さん。もういらんよ、返してくれなくていい、いらん  
妻　　（泣く）

玉井、玉井の妻、下を向いてうなだれる。

佐伯　あの、西島さん

西島　ん？なんね

佐伯　あの、玉井、100万盗ったの？

西島　そうよ

佐伯　え、（玉井に）お前、そんなことしたの

玉井　・・・

西島　ほらこの前もあつたやろ

佐伯　え、この前も？

西島　佐伯くん知らんの？

佐伯　知らんよ

西島　えー

佐伯　えーって、こつちがえーやけね

西島　今回で2回目よ。やけ、もうさようなら

佐伯  
そうだ！そんなヤツはさようならだ！うせる玉井！

佐伯、急に泣きだしてしまふ。

佐伯  
わーん、さようならだーあー

西島  
え、佐伯くん、玉井くんのこと、まさか

佐伯  
ごめんなさいーあーん

西島  
うわーそんなことってあるんかね

佐伯  
ほくもクビにして下さい

西島  
え、なんでなんで

佐伯  
車、車

西島  
あ、ぶつけた？

佐伯  
もつと

西島  
え、廃車までいったね、怪我しとらんの

佐伯  
(クビを横に振る)

西島  
どうしたん

佐伯  
車、盗られました、やけ、もうクビです、おれ。ごめんなさい

西島  
わー車泥棒かー

佐伯  
おれが悪いんです。門司の方に生地とりに行って、海で釣りしよるじいさんがやたらめつたら魚釣りよるもんやけ、ちよーつと車置いて見に行った隙に・・・ほんとごめんなさい



妻 売れば、それなりのお金にはなると思いますが、そもそも西島さんたちのお

金ですし

佐伯 あの、おれが言うのもおかしな話かんですけど、もらつときませんか？

西島 ・ ・ ・ そうやね

西島、首飾りを受け取る。

西島 玉井くん

玉井 はい

西島 君も、戻つて

玉井 え

佐伯 え

西島 損失の分、注文とつて来れるよね？

玉井 ・ ・ ・ はい！がんばります！

西島 またやったら、わかつとるね？

玉井 はい！

妻 ありがとうございます

西島 じゃあまた明日からよろしくね

玉井 はい

西島 あ！時間！

佐伯 あ、キャバレー

西島 ごめん佐伯くん、お皿、お願いしていい？あと、2人とも、冷めたと思うけど、もったいないけ食べり。(佐伯に)あ、そっか、今日親に会うんよね  
佐伯 いや、大丈夫です、洗います  
西島 佐伯くん、もう敬語やめよ、ね  
佐伯 うん、ありがとう

西島、立ち上がるが、右足がしびれている。

西島 ああああ、ああああ  
佐伯 どうしたん  
西島 足痺れとる、あああいかん  
佐伯 あーあ、玄関まで行く？  
西島 いやーこうなるといかんね、お願い  
佐伯 はいはい  
西島 よいしょー

佐伯、西島をおぶって玄関まで行く。

残された、玉井、玉井の妻は顔を見合わせ、ライスカレーに目を落とす。スプーンを持ち、冷めたライスカレーを口に運ぶ。  
涙ぐむ玉井。

「家族」

作 藤本瑞樹

【登場人物】

雄一 64歳

加奈 22歳・雄一の娘だが、血は繋がっていない

ファミレス。夜の7時ごろ。

4名掛けの席に、雄一が座っている。

加奈が入ってくる。

雄一が手を挙げ、加奈はそれを見つめる。

加奈が座る。

加奈 ごめん、遅くなって。

雄一 いや、

加奈 バイト、夜シフトの子がなかなか来んで。連絡もなしで。

雄一 ああ、

加奈 ごめんね。

雄一 ああ、うん。……腹、減ってないか？  
加奈 ああ、そうやね、うん、おなか減った。  
雄一 なんでも食うていいぞ。  
加奈 おー。

加奈、メニューを見る。

すぐ決めて、店員を呼ぶボタンを押す。

雄一 なんか？  
加奈 なんが？  
雄一 いや、メニュー。  
加奈 ああ、この、ペッパーハンバーグ&若どり南蛮。の、セット。ライス大盛。  
雄一 よく来るんか？  
加奈 え、なんで？  
雄一 いや、すぐ決めよったけ、  
加奈 ああ、  
雄一 いつつも来て、それ頼みよるんかなあち、  
加奈 いや、別に。あんま来んよ。  
雄一 そうか。  
加奈 うん。  
雄一 まあ、加奈はお母さんに似てこういうのすぐ決めれるけな。

加奈 あー、そういうところ似たんかもね。

雄一 ふふ。

加奈 雄……一さんは、いいと？なんも頼まんで。

雄一 ああ、俺はドリンクバー？ていうの頼んどるけ。……飲み放題なんやろ？  
うん。

加奈 雄一さん、も、あんま来んのやね。

雄一 そらそうよ。

加奈 ここ行きつけなんかち思ってた。

雄一 違うよ。

加奈 それやったら、別に普通に、喫茶店とかでよかったんやないん？

雄一 うん、けどまあ、なんか、

加奈 まあ、いいけど。

雄一 うん。

店員が来た（らしい）。

加奈、自分の分を注文する。

店員は去る。

加奈 え、で、なん？

雄一 （同時に）バイトで

加奈 ……え、なん？

雄一 いや、なんか？

加奈 え？なん？

雄一 あ、いや、バイトで、なんしよるんかて思うて。

加奈 本屋よ。前言わんかったつけ？家の近所の。自転車です分もかからんところ。

雄一 ああ、

加奈 今日は朝から5時まで。

雄一 学校は？

加奈 今日は、授業ないんよ、もう。

雄一 そうなんか。

加奈 もう4年にもなったら。

雄一 そうか。

加奈 え、で、なん？

雄一 ん？

加奈 いや、話で。

雄一 ああ、うん……。

加奈 ……。

雄一 ……うん、いや、な、……。

加奈 ……なん！

雄一 うん、……加奈、好きなひととかおるとか。

加奈 ……え、なんで？

雄一 ……うん、いや、

加奈 ……え、お母さんから、なんか聞いた？

雄一 いや？

加奈 ……まあ、別に、うん、ふつうよ。

雄一 ふつうてなんか。

加奈 好きと思うひとはおるけど、……付き合っではない。

雄一 そうか。

加奈 え、なん？なんなん？

雄一 いや、

加奈 なん？お母さんになんか言われたんやろ？なん？はつきり言いつちや。

雄一 別になんも言われとらんよ。

加奈 ほんとに？

雄一 逆に訊くけど、なんかあるんか？

加奈 ……ないけど、

雄一 ならいいやないか。

加奈 ……えなん、ほんとにお母さんになんか言われたんやないん？

雄一 え、いや、全然。

加奈 ほんとに？

雄一 ほんとちゃ。

加奈 えじゃあ私墓穴掘った感じ？

雄一 なんか墓穴で。

加奈 ……最悪。

雄一 最悪なんか。

加奈 ……まあその、あんまりひとには言えんような、恋愛を、しよるんよ。

雄一 なんかそら。なんかひとに言えんて。

加奈 やけ、ひとにはあんま堂々と言えんような

雄一 不倫か。

店員がハンバーグセットを持ってきたらしい。

加奈は動けない。

雄一 食べるのか。

加奈 い……ただきま……す。(食べ始める)

雄一 え？当たり前か。

加奈 ……あとでちゃんと話すよ。

雄一 否定はせんのやな。

加奈 ……平べったく言うよ、そうよ。

雄一 おいおいおい……。

加奈 それは、雄一さんもひとのこと言えんやろ。お母さんも。

雄一 お父さん……俺たちは、ちゃんと結婚もして

加奈 でもさ、不倫やったわけやろ？一時期でも。

雄一 それは、……否定はできんけど、やけど、していいいうわけやない。

加奈 やけ、話したくなかったんよ。

雄一 ……。

加奈 いまのは私が完全に墓穴掘ったね。

雄一 墓穴で思いよるんなら

加奈 そんなん当の本人がいちばんわかっとるよ。

雄一 ……そうよな。

加奈 ……え。なん、

雄一 ん？

加奈 あ、いや、もつとこう……ガツと来るかち思うて、

雄一 俺にも経験があるけ、わかるよ。

加奈 あ、それは、……どうも。

雄一 ……加奈は、ほんとお母さん似なんやな。

加奈 なん、

雄一 いや、

加奈 呆れられるかち思うた。

雄一 呆れんわけでもないけど、わからんでもない。

加奈 なんそれ。(苦笑する)

雄一 ……ばあちゃんの話してもいいか？

加奈 おばあちゃん？

雄一 俺の、母親の話よ。

加奈 ああ、うん。え、なんで？

雄一 まあいいけ、聞けちゃ。

いいけど。

雄一 ばあちゃん、俺の母親は、俺の実の父親と結婚して、若くで俺を産んだんやけど、親父は、戦争が終わってちよつとして亡くなったんよ。で、母親が女手ひとつで俺やら兄弟やらを育ててきたんやけど、あるとき、男連れて帰ってきた。

うん。

雄一 ……これがろくでもない男で、家に金は入れんで、ふらふらして。母親は余計にひとり食わせないけんもんやけ、働き通しで、ろくに俺たちの面倒も見らんやった。

うん。

雄一 その男との間にもふたり子供ができて、やけど育てられんてなって、子供ふたりとも施設に預けることになる。まあこの男とは結局別れるんやけど、しばらくしたらまーたるくでもない男とくつついた。

はあ。

雄一 俺は本当それが嫌やった。なんでこの女は俺たちの嫌がることをするんやろう。ろくに俺たちの面倒も見んと、なんでろくでもない男にばかり現を抜かすんやろう。それが嫌で嫌でたまらんで、……俺あ一時期はあちゃんとして親子の縁切つとつたんよ。

え。そうやったん。全然知らんやった。

雄一 なんだかんだで結局また縁は戻ったけど、そしたら今度は俺が、不倫や。(苦笑する)

加奈

あ、え？ここ笑っていいん？

雄一

おう笑え笑え。……もう最悪よ。俺が母親と大して変わらんことをしよる。

芳子に……お母さんに、俺の母親と大して変わらんことをさせよる。……

因果ちゆうんは、ほんとにあるんやろなあ。

加奈

うーん。

雄一

そしたら今度はお前、お前が不倫で。

加奈

やけそれは、……わかつとるよ。私も別にこのままずるずる続ける気はないよ。

雄一

……まあ、好いた惚れたは、本当はどうしようもないんやけどな。

加奈

でもまあ、ふつうに説教されるより効くよね、いまの話。

雄一

そうか？

加奈

うん。

雄一

血いなんかな。

加奈

……まあ、(なにか言いかけて、やめる)

雄一

(言いかけてやめた内容がわかって) うん。

加奈

まあ、ちゃんとします。

雄一

うん。

加奈

話それだけ？

雄一

ああ、うん、いや。

加奈

……なん。

雄一

うん、

加奈 ま、別にすぐ帰らんでもいいけど。

雄一 ……俺はな、俺たち兄弟は、みんな学がないのがコンプレックスやった。

加奈 え、雄一さん頭いいやん。

雄一 けど所詮独学や。

加奈 本もたくさん読んどるし。

雄一 まあ、学ぶのが好きな血なんやろな。

加奈 ふーん。

雄一 けど、やっぱりちゃんと勉強して、大学行って、ちゃんと大学で勉強したかったと思うよ。……やっぱりね、新日鉄、むかしは八幡製鉄で言いよつたけど、新日鉄で働きたかったよ。ほいでたくさん稼いで、なに不自由ない暮らしをすることに憧れたよ。

加奈 ふーん。そういうもんかねえ？

雄一 けど、俺は無理やったけ、

加奈 満足してないん？人生。

雄一 満足してないけど、……いや、してないんかもしれん。

加奈 ……。

雄一 まあ、血は繋がってなくても、娘やけ、……不幸にはならんでほしいよ。

加奈 ……はーい。

雄一 ……なんか、話そうと思つとつたことがあったんやけどな、……忘れてしまった。

加奈 ……知つとるよ。

雄一 え。

加奈 お母さんから、聞いた。

雄一 ……そうか。

加奈 うん。

雄一 そうか。

加奈 うん。

雄一 なら、まあ、……そういうことや。

加奈 うん。

雄一 まあ、加奈も裕美ももう大人やけ、な。

加奈 うん。

雄一 いろいろ嫌な思いもさせたやろうけど、

加奈 別にそんなことないよ。

雄一 ……うん。

加奈 その、なんでなん、って、訊いてもいい？

雄一 うーん、こればかりは、説明するのは難しいけなあ……。

加奈 そっか。

雄一 まあ、嫌いになったとか、そういうのやない。

加奈 そか。

雄一 ……いまになって、おふくろの、……ばあちゃんのが少しずつわかってきた気がするんよ。

加奈 ……なん？

雄一 あのひとつも、……ただ必死やったんやなあち。  
加奈 あー、  
雄一 それがわかったときには、俺ももういいじいさんや。  
加奈 まだまだ若いやん。  
雄一 そうか？……そうやる？  
加奈 どっちなん。  
雄一 俺最近コーラス始めてな。  
加奈 へえー。歌うまかったつけ？  
雄一 うまいんよこれが。  
加奈 なん。人生たのしんどるやん。  
雄一 そらせつかくやけ、たのしまな。  
加奈 そうやね。……満足してそうやん。  
雄一 うん、やけ、まあ、加奈も、……なんていうか  
加奈 うん。  
雄一 不倫は、やめます。  
加奈 ははははは。不倫やけいい、みたいなところもあるもんな。  
雄一 なん言いよん！バカやないん。  
加奈 ドキドキするもんな。  
加奈 バカなん。

雄一 「あと、なんだかんだ言うて向こうも別れんやろち、胡座かいとるところもあつたし。

加奈 ああ、父親と？

雄一 ……うん。

加奈 そしたらすぱつと別れたんや？

雄一 おお、びつくりした。

加奈 あはははは。私も向こうがそうなたらびつくりするかも。

雄一 そうなつたらお前、責任とってちゃんと結婚せんな、

加奈 あはははは。いやだ。

雄一 やけ、やめとけ。不倫は。いろいろ責任重大やぞ。

加奈 いまの話がいちばん重いわ。

雄一 実体験やけな。

加奈 ね。お母さんと結婚どころか、娘もふたりくつついてきて。

雄一 な。娘も、かわいかったらよかったのにな。

加奈 かわいいやろ。

雄一 おお、かわいい、自慢の娘やったよ。

加奈 ……なん、やめてよそういうの、気持ち悪い。

雄一 冗談よ。

加奈 (苦笑する) まあ、別にさ、お母さんとはさ、書類だけのことやろ？

雄一 う……ん。

加奈 私の、お父さんには、変わらないけさ。

雄一 ……。

加奈 まあたまにはご飯おごってね。ファミレスでいいけ。

雄一 おお、金なくなったら連絡せえ。

加奈 毎晩連絡する〜。

雄一 ちゃんと働け。

加奈 あはは。じゃあ、行くね。

雄一 ああ、

加奈、伝票を持って行こうとする。

雄一 金ないんやけ置いとけちゃ。

加奈 ポーズよポーズ。払うふり。

雄一 かわいくない娘やな。

加奈 父親に似たんやろね。

雄一 ……いいけ行けちゃ。

加奈 またね。

加奈去る。

雄一はしばらくそこから動こうとしない。

# 最後の結婚式

作 藤本瑞樹

## 【登場人物】

新郎 34歳

新婦 32歳

荒井 35歳・ガーデンベルクで結婚式・披露宴のコーデイネートを担当している

いまより少し未来。

7月のある日のこと。

古くから八幡にある結婚式場「ガーデンベルク」の一室。

ここで従業員の荒井と新郎新婦が、結婚式の打ち合わせをしている。

新郎 ですからこう、花嫁がね、彼女がね、登場するじゃないですか、

荒井 ええ、

新郎 白いドレスをね、着てるわけですよ、比較的シンプルな感じの。

荒井 はい。

新婦 えー、白なの？私かわいいカクテルドレスとかがいいんだけど。

新郎 まあまあまあ、ちよつと聞いて、

新婦

新婦

どうせアレでしょう？

そこにね、プロジェクトクションマッピング。衣装に。ドレスに。当てるわけですよ、パーッと、光を。

はい。

光によっていろんなデザインになるドレス。どうですか？よくないですか？

アイデアとしては、とてもユニークですね。

でしょう。

だからそしたら私動けないんだって。

だから動きはアレだけど、ちよつと制限されるかもだけど、練習したら動きに合わせてそういうのもアレできるから、調整。

自分がやりたいだけじゃん、それ。

そんなん言ったら自分が着たいだけになるじゃん、カクテルドレス。

そうだけどさあ、

俺はね、別に自分がどうしてもやりたくて言ってるんじゃないの。来てくれたひとを楽しませるっていう、ね、エンターテインメント。披露宴に来てくれたひとに、おおつて思ってもらいたい、そういう気持ちでね、

私だって好きなドレス着て楽しみたいよ。

あの、立花さま。

はい。

ちよつと、気になることがあるんですが、

はい、

はい、

はい、

新婦

荒井

新婦

荒井

新婦

新婦

新婦

新婦

新婦

新婦

新婦

新婦

荒井

新婦

荒井

荒井

たとえばそういう……プロジェクトシヨンマッピングみたいなことをうちでやらせていただくとなると、その、さつきから少し気にされていたような、ご予算の部分で

新郎

あ、そこは大丈夫です、うち、そういうことやってる会社なんで、ああ、

新郎

会社からもうものすごく格安で借りれるんで、機材。なるほど。

新郎

せっかくやるんならね、ちよつとくらい、こう、印象に残るようなやつを、シンプルでいいよー。

新婦

最初は俺もそう思ってたけどさ、すいません、お金あんまりないっていうのに。このひと、言い出したら聞

新婦

かないんで、いやいやいや、せっかくのおふたりの大事なお祝い事ですからね。ぜひお

新婦

ふたりが納得するものを、ね、やるからにはね、

新婦

お金ないのに。

新郎

お金は工夫次第でどうにかなるって。内容に関しては、予算に合わせてこれからじっくり考えていきましょう。

荒井

まだ8か月くらいあるし。準備に十分時間を取れることで、お金もある程度抑えられるものがありますし。

新郎 ちよつと早かったですかね？

荒井 え？

新郎 あ、いや、準備っていうか、その、こういうの、とりかかるの、

荒井 まあ、少し余裕はある感じはしますけど、早すぎるということとは

新婦 周りに結婚式とか披露宴とかするひと、ほとんどいないから、

新郎 目安がわかんなくて。

荒井 最近は、そうですね。入籍だけっていうケースが増えて、披露宴どころか

新婦 結婚式もしないという方ばかりですからね。

新郎 正直あんまり式とか披露宴の準備ってイメージがわかなくて。

荒井 わかります。ただ、意外とやることがあるので、普段お仕事されながら準備

していると、もうあつという間に当日を迎えてた、みたいなことも、結構

新婦 みなさん言われますね。

荒井 そうなんです。

新婦 そういう煩わしさもあって、みなさんどんどん結婚式や披露宴をしなく

新郎 なっていったんでしょうけど。

新婦 周りの友だちでも、いないですもんね、まだ。披露宴するっていうやつ。

荒井 私も1回しか行ったことないです。披露宴。

新婦 出してみると、結構いいものだったでしょう？

新婦 そうですね。なんかこう、うまく言えないですけど、幸せ、っていう感じがしましたね。

荒井　むかしは当たり前前やってたことなんですけどね。

新郎　むかしつつつても、つい20〜30年前でしょう？

荒井　そうですね。

新婦　うちの両親も、ここで式したんですよ。

荒井　え？　そうなんですか？　（名前を確認して）桜井さま、

新郎　それだけじゃなくて、彼女の母方の祖父母、おじいちゃんとおばあちゃん

もここで式挙げたらしくて。

荒井　ええ？　すごい！

新婦　そうなんですよ。

新郎　それで僕たちもここでやりたいなって思ってた。

荒井　ありがとうございます。

新郎　うちはもう親は入籍だけっていう、入籍と身内だけの簡単な式だけっていう、式って言っても形だけみたいな、そんな感じだったらしいんで。

荒井　30年ちよつと前でしたら、ちようど、そういう形が少しずつ増え始めた時期ですね。

新郎　そうですね。

新婦　だから、っていうのもあるんですけど。

荒井　というの？

新郎　やっぱ親がね、披露宴もやっつけばよかったみたいなこと言うんですよ。

荒井　いまだに。一生に一度のことだから、みたいな。どうせならやらないよりは

新郎　はやった方がよかった、みたいな。……まあ、古い考え方ですけど。

いやいや。

でも実際問題結構金かかるじゃないですか、正直、こういうのって。だから初めはあんま気が進まなかったんですけど、でもまあ、やるときゃいいんでしょ的な、満足するんでしょ的な、周りが。そういうの、あるじゃないですか。親とかって。

結婚式とか披露宴って、自分たちだけのことじゃないから。

やっぱ親とかも何年経っても、ねえ？言ってるわけだし。やっときゃよかつたって。

だからそういうのは、なんて言うんですかね、期待に応える、じゃないけど。ハレのイベントっていうんですかね、こう、儀式っていうか、そういうのはまあ、やることで安心するひとがいるわけだから。

それで私たちも、まあやるか、みたいな感じになつて。

だからほんと、まあ、形だけでいいんですよほんと。やりました、みたいな。とか言つてたのに、いざとなると妙に張り切っちゃつて。

やっぱ、ねえ？テンション上がりますよね？

新郎さまがここまで乗り気だと、新婦さまもうれしいでしょう？

うーん、

やっぱ結婚式や披露宴は昔から女性が主役のように言われてきましたからね。男性はもうお任せみたいの方が多いですよ。

あー、うち逆だ、真逆。

だから、マキをね、きれいって思ってもらいたくて、いろいろ考えてんの。

荒井  
新郎

新婦  
新郎

新婦  
新郎

新婦

新郎

新婦

新郎

荒井

新婦

荒井

新婦

新郎

新婦

なんだかんだ言っつてイベント屋ですからね、このひと。だから、いろいろ言ってますけど、賑やかなことしたいんですよ。ね？

新郎

いやいやいやそういうんじゃないって。

荒井

理由はどうであれ、いまの時代に、そういった形に則るのはよいことだと思いますよ。

新郎

でしょう？

新婦

ここで結婚式するカップルって、他にどのくらいいるんですか？

荒井

先月、1組挙式されましたね。ちょうどジューンブライドで。

新郎

……ジューンブライドってなんですか？

荒井

6月に挙式されることですよ。

新郎

6月はなんかあるんすか？安くなるんすか？

荒井

6月に結婚すると幸せになれるみたいな言い伝えがあつて。

新婦

へえー。

新郎

マーケティング的なにおいがぶんぶんしますね。

荒井

(苦笑して) 実際、結婚式場がジューンブライドを広めたそうですけどね。

新郎

やっぱり。

新婦

これから先の式の予定ってどんな感じなんですか？

荒井

次は、10月に1組と、11月に1組予定があります。

新郎

そんなもんなんすね。思ったより少ないな。

荒井

……たぶん、立花さまと桜井さまのご結婚式で、ここでの挙式は最後になると思います。

新郎

新婦

荒井

新郎

荒井

新婦

荒井

新郎

荒井

新婦

荒井

新婦

荒井

新婦

荒井

新郎

荒井

新郎

はあ、

えっ、最後って言うのは？

実はここ、来年の3月で閉館するんですよ。公表するのはもう少し後の予定なので、いまは聞いてないことにしていたのですが。

ほんとに？

はい。

3月って、3月末までですか？

その予定です。

潰すんですか？

潰すというか、

壊す？

建物自体の取り壊しはわかりませんが、ひとまず、営業は終了、という形に、えっじゃあほんとに私たちが最後になるかもしれないんだ、ここで式するの。

そうですね。

えー、なんですか？

まあ、私どもも会社としては冠婚葬祭以外にもいろいろやっていますけど、

……やはり採算ベースで考えると、いちばん採算が合わないのが

あー、

結婚関係の、こういったものが、やはり……

そうかー。

荒井 「あまりおおっぴらに言えることじゃありませんが、冠婚葬祭の「葬」の方

は、年々ニーズは増えて来てるんですよ。

新郎 ですよね。

新婦 でももったいないよね。

新郎 老舗なのに。

荒井 老舗だから、でしょうね。

新婦 飽きられた、ってことですか？

荒井 まあそういうのも理由のひとつにはあるかもしれませんがね。

新婦 えー、いいところなのに。

荒井 ……実は私の祖父も、この式場で働いてまして。

新郎 おじいさんも、

荒井 勤めていたのはもうずいぶん昔になりますが、接客から結婚式のコーディネ

ーターから営業からと、なにからなにまでしていたようで。

新婦 へえー、じゃあうちの両親の結婚式も立ち会ったりしてますかね？

荒井 もしかしたら立ち会ってるかもしれませんね。

新婦 おおー。

荒井 まあ、言ってしまったえば役目を終えたんでしょうね、ここも。

新婦 えー、かなしいー。

新郎 そういうもんなんですかねえ。

荒井 一言で言えば、時代、ということなんでしょうけど、

新郎 うーん、

荒井

ご存知かと思いますが、もともとは銀行だったんです。明治時代からある建物で。銀行が閉鎖して、私どもの会社がい取って、結婚式場としてオープンして。だから建物としてはもう130年くらい経ちますかね。もともと老朽化も進んでいて。

新婦

なんか、残念だね……。

荒井

むかしの八幡製鐵所の、従業員の8割はここで結婚式をしたと言われていたくらいなんです。

新婦

えっすごい。

荒井

他にも文豪の森鷗外や松本清張もここで式を挙げたとか、

新婦

えっ、ほんとですか？

荒井

そういう冗談が言われてた、というだけなんです。

新婦

なんだ、冗談か。

新婦

でもそういうところがなくなるのは、淋しいな。

荒井

そう思っていただけで、ガーデンベルクがいままで営業を続けた意味があつたのかもしれない。

新婦

なんかこういう、老舗の、伝統っていうか、歴史みたいなのは、……なん

新婦

だろ、うまく言えないけど、

新婦

大事にしたいよね。

新婦

うん。

荒井

……。

新郎

新婦

荒井

新郎

新婦

新郎

荒井

新婦

荒井

新郎

荒井

新郎

新婦

荒井

新郎

……まあ、俺たちがここで最後の披露宴をするかもしれないんだったら、来てくれるみんながここのことずっと覚えててくれるようなものにはしないと。そうだね。

……ありがとうございます。そのお気持ちだけでも、もう。じゃあやっぱりプロジェクトエグゼクションマッピングでしょう。

そこに戻るんだ？

もうなにがなんでもいいものにするんで、最後の名に恥じないものにしたいと思うんで、……そのかわりちよつと予算の相談をさせてもらいたいです、

(苦笑して) そう来ましたか。

(名前を確認して) 荒井さん、も、こういうのプロでしょうけど、こっちもイベントに関してはプロですから。

ははははは、そうですね。

ということでは早速なんですけど、

ええ、

(iPadのようなものを見て) この招待状って、1通700円って書いてありますけど

これって送料も全部込み込みで？

これは文面のご用意と、ご招待状や会場案内など一式の印刷費でして、

送料は込まない？

荒井

ええ。

新婦

うえー、

新郎

えーじゃあ送料別で1通700円、

荒井

と、消費税が別途、

新婦

12パー、

新郎

の、80通。(計算して)うえー、これだけで結構するな。

新婦

メールとかじゃだめなんですか？

荒井

最近ではメールやLINEを使う方も多いですね。

新郎

あ、じゃあもう俄然LINEだ。

荒井

メールの方が丁寧と思われるようですけどね。

新婦

じゃあメールだ。

新郎

そうだなあ。

荒井

ケーキカットとキャンドルサービスはどうされますか？

新郎

これももう、なあ、

新婦

うん。

新郎

さつき言われてたみたいなの、お持ち帰りのお菓子と、込み込みのプランで、

荒井

かしこまりました。

新郎

あと衣装なんですけど、さつきも言ったように……

こんな感じで、未来のかなり簡略された結婚

式の打ち合わせは進んでいく……。

# 左官屋さんの恋

作 塩津順子

## 【登場人物】

ツトム 武藤左官店の左官見習い。20歳。

小林 武藤左官店の左官見習い。25歳。ツトムの先輩。

みよこ 武藤左官店の親方の妻。45歳。

昭和37年（1962年）8月。夕方。

武藤左官店の下宿部屋。

ツトムはあぐらをかいて左官ごてを磨いている。

ツトムの側には、封筒や手紙が2、3枚開きっぱなしになっている。

ツトム うまくいかんなあ・・・

そこへ、足音が聞こえてくる。

小林 おーい、ツトムー、

ツトム、手紙を片付け始める。

小林 おい、ツトムおるんか。

ツトム はい、います。

小林 入るぞ。

小林、構わず入る。

小林の後ろには、みよこがいる。

小林 なんごそごそしとるん。

ツトム い、いえ。お疲れ様です。

小林 お前、聞いたぞ。

ツトム は？

みよこ あんた、辛かろうね。

ツトム え、なにがですか。

小林 お前、女に振られたんやろ。

ツトム 振られてませんよ。

小林 隠さんでもいって。

ツトム ほんとです。振られてないです。

小林 でもお前、泣きながら帰ってきたって、皆言っとったぞ。

ツトム いやいや泣いてないですよーあ、みよこさんですか、俺のこといろいろ言ったの。

みよこ だって、あんた、心配やったんよ。泣きながらダ―ッと階段登って。

ツトム だから泣いてないですって。

みよこ うそ、すごい顔しとつたよ、あんた。グシヤグシヤやったやん。

ツトム 泣いてないです！泣きそうだったかもしれないけど、泣いてはなです！

小林 まあまあ。で、何があつたん？

ツトム いや・・・気にしないでください。

小林 えー気になるやん。

みよこ 教えてよお。

ツトム だって言つたら、すぐ噂になるでしょう。下宿内で広まって、そしたら5

軒先まで広がるじゃないですか。だから、落ち着くまで言いません。

小林 大丈夫って。誰にも言わんけん。

ツトム 信じませんよ。

小林 今度、庭掃除代わるけん。

ツトム 言いません。

小林 じゃあ昼飯奢る。いや、やっぱ俺、なんもせん。

ツトム え？

小林 相談乗っちゃるのに、なんで俺がいろいろしてやらんといかんと？今日

あつた出来事を言え。これは先輩命令や。

ツトム 強引やなあ。

みよこ 私も小林くんも、誰にも言わんけん。言ってみ。

ツトム　・ ・ ・あの、俺、今、文通してる女の人があるって、小林さんに相談した

じゃないですか。

小林　おう、春子さんか。

ツトム　そうです。その春子さんのお母さんに、結婚させてくださいって、言いに

行ったんですよ。

小林　おお！それで？

ツトム　まあ、わかるとは思いますけど ・ ・ ・。

ツトム、黙り込む。

小林　なあ、どうなん。

ツトム　ダメでした。

小林　・ ・ ・そうか。

みよこ　もー、なんでかねえ。

ツトム　はは ・ ・ ・

小林　なあ、なんでダメやったと？

ツトム、言い淀んでいる雰囲気。

ツトム　・ ・ ・俺が左官屋だから。

小林　は？

ツトム 俺が左官屋だから、どうせ幸せにできんやろって、言われたんです。

小林 なんなんそれ。どういうこと。

ツトム 春子さんのお母さんは、ガチつと稼ぐ男と結婚させたいらしい。

小林 なん、ツトム、しつかり働いとるやん。

みよこ いや、そういうことやなくて、ほら・・・。

小林 ああ、そうか、サラリーマンか。

ツトム そうなんです。左官屋は、雨が降ったら仕事がない、ボーナスもない。うちの娘は製鉄マンやないと結婚できん、って。

小林 はー、結局世の中金なんやね、やつぱり。

ツトム でも、俺、諦めきれません。

みよこ そりゃそうやろ。にしても聞き捨てならんね、左官屋やけどめとか。

小林 ツトム、もう一回行ってこいよ！

ツトム ええ？

小林 言っちゃり、雨が降ったときは、中での仕事もあるし、うちの親方は気前

いいけ、こずかいくれる時もあるって。

でも・・・製鉄マンには敵いませんよ。

小林 いやいや、敵うもんあるやろ。

ツトム え？

小林 俺らにあって、製鉄マンにないものが！

ツトム え、そんなのあるんですか。

小林 あるやろ。

ツトム それはなんなんですか。

小林 ・・あるやん。

ツトム 小林さん思いついてないっすね。

小林 ーや、ある。お前考え出せ。

ツトム うーん・・ダメです。製鉄マンの方が、絶対給料いいし、いい大学だっ

て出とる。それに、鉄はずーっと生活にいるもんやし・・・

みよこ いやいや、左官屋だつて、この先ずーっと必要な仕事よ。製鉄マンに壁塗  
れる？塗れんやろ。

ツトム それはそうですよ。でもそれは当たり前っていうか・・

みよこ その親御さんは、左官屋の大切さを全然わかつたらんね。

小林 いっそ、そんな家の女、嫁にもらんほうがいいんやないか。

みよこ そうよ。ツトム、近所のヨシエちゃんにしたらいいやん。あの子、しっか  
りしとるし、感じいいけん。

小林 ヨシエちゃんかわいいよなあー！

ツトム ちよつと、ずれてきてますよ。俺は、春子さんが、いいんです！

みよこ 春子さんのどこがそんなにいいん。

ツトム それは、うまくいえんけど、春子さんがいいんです。

みよこ やけ、なんでなん。

ツトム なんでとか、そんなないんです。・・初恋なんです。

小林 おお？

ツトム 初恋というか、ここまで好きになったのは、初めてなんですよ。

みよこ

へえ。

ツトム

俺、今では春子さんのために仕事したいって思ってます。

ツトム、そばに置いてある左官ごてをじっと見る。

みよこ

わかった。あんたの真剣さわかったよ。

ツトム

あ、すいません。俺、恥ずかしいこと言っちゃって。

みよこ

いや、全つ然恥ずかしくないから！私、全力で応援するけ！

ツトム

あ、ありがとうございます！

みよこ

ツトム、私ね、いいこと思いついたんよ！

ツトム

えっ。

みよこ

うちの人に言っつて、ついてきてもらうんよ！

ツトム

ええ・・・。

小林

おお、それいい！親方おつたら向こうも断りづらいやん。みよこさんさすがです！

みよこ

やろ？

ツトム

ま、待って下さい、それはいいです。

小林

なんで！

ツトム

それは恥ずかしいですよ。

みよこ

なんも恥ずかしいことやないよ、人を好きになる気持ちは。

ツトム

そうじゃなくて、親方を連れてくなんて、半人前にみられるじゃないですか。

ツトム

ツトム

みよこ えー、いい方法と思うけど。

ツトム みよこさんだって、そんな男嫌でしょ？

みよこ まあ、うん、そうねー。でもねー。

ツトム 親方連れてくるのだけは、絶対やめてくださいよ。

小林 じゃあさ、俺が春子さんのお母さんに、ツトムのことめっちゃ良く言っと

ツトム こうか。あいつめっちゃ真面目でいいやつなんすよーって。

小林 それもやめてください。俺が仕込んだと思われるじゃないですか。

ツトム じゃあ俺たちは何をしたらいいん。

小林 何もしなくていいです。こうやって話聞いてくれるだけでいいです。

ツトム そ、そうか……。

三人、黙り込む。

小林 まあー、ツトム、あれや。

ツトム はい？

小林 歌をうたえ。

ツトム 歌？

小林 おまえ、あれ上手かったやんか。うーえーをーむうーいーて・・

みよこ ああ！酔っ払ったら必ず歌うやつね。

小林 ツトム、いい声しとるけんいけるんやない。

ツトム いや、結婚の申し込みの時に歌を歌ったら変でしょ。

小林 いいやないか。歌ったって。

ツトム よくないです。

小林 じゃあ、お前、お母さんに花を贈り。

ツトム なんで花なんですか。

小林 女を落とすときは、花を贈るのが基本やろ。

ツトム 落とすのが目的じゃないんですけど。

小林 落とすのも説得するのも同じようなもんやろ。

ツトム あーもう、いいですから、ちょっと一人にしてください！

ツトム、立ち上がって、小林とみよこを出口の方へ追い出そうとする。

みよこ小林、しぶしぶ立ち上がる。

みよこ なによー

ツトム ほらー！

小林 ツトム、これだけは言っとくけ。

ツトム なんですか。

小林 お前、いい声しとる。

ツトム 絶対茶化してるでしょ。

小林 ほんとよ。

ツトム はいはい出てってください。

小林 わかったよ。

みよこ  
ツトム

夕飯には降りてくるんよ。  
はい、ありがとうございます。

小林、みよこ、出て行く。

ツトム、一息つく。

左官ごてを手にとって、磨き始める。

やがて、上を向いて歩こうを口ずさみ出す。

## スーツの人

作 塩津順子

### 【登場人物】

吉木 石川商店の事務員女1。28歳。

飯田 石川商店の事務員女2。吉木の後輩。21歳。

高野 石川商店の営業。社員旅行の幹事。26歳。

竹内 常務。西島の作るスーツをとても気に入っている。

西島 背広職人。35歳。

昭和45年（1970年）9月。

観光バスの中。まだ発車していない。

車内の後方の席に、事務員女（吉木）が座っている。

前の方には、男性社員たちが座っている。

そこへ、女（飯田）がやってくる。

飯田 おはようございませす。

吉木 おはよ。

飯田 早いですね。

吉木　　せつかくの社員旅行やけね、気合い入れたんよ。  
飯田　　さすがですね。  
吉木　　まあね。  
飯田　　吉木さん、あの、常務の横の人、どなたですか？

飯田、前方の席の男性社員たちを見る。

吉木　　さあ。

飯田　　さあつて。

吉木　　知らないわよ。私も初めて見るから。

飯田　　取引先ですかね。

吉木　　どうかしらねえ。

飯田　　でもサラリーマンって感じじゃないですよね。

吉木　　うーん・・・でもスーツはしつかりしとるね。

飯田　　はい。

吉木　　常務も旅行にわざわざスーツなんか着ちゃつて。

飯田　　偉い人なんですかね。

吉木　　高野くーん！！

吉木、前の方にいる男（高野）を呼ぶ。

高野

はい？

吉木、手招きする。

高野、吉木たちの方へ行く。

高野

なんすかあ？

吉木

ねえ、誰？

高野

え？

吉木

常務の横の人。あの、おしゃれな人。

高野

ああー、あははは。

高野、思い出し笑い。

吉木

なになに。

高野

いやいや、あの人、すごいんですよ。

吉木

すごい？

高野

はい。なんか、競馬の勝率が9割以上って言ってましたよ！

吉木

9割？嘘でしょ。

高野

いやいや、嘘じゃないと思いますよ。この前の大会の大穴、ばっちり当て

吉木

てましたもん。

吉木

なんでそんなことわかるのよ。

高野 いや、西島さんが自分で言っていました。

飯田 西島さん？

高野 そうそう。あのスーツの人、西島さん。

吉木 いや、名前だけ言われても。何してる人なの。

高野 さあ。

吉木 名刺交換とかなかったの。

高野 俺今日名刺持ってきてないです。

吉木 えー、じゃあ何関係の人かわからないじゃない。

飯田 競馬以外に、なにか話しましたか？

高野 あー、あと、美人姉妹がいる喫茶店を貸切にして、朝まで飲み明かしたって言っていました。はは。

吉木 いや、それは職業と関係ないでしょ。

飯田 わかりました。

高野 えっ。

飯田 競馬が得意で喫茶店で飲み明かす……ときたら、やっぱり賭博師ですね！

吉木 いやいや喫茶店と賭博は関係ないでしょ。

飯田 あります。競馬で買ったお金を、飲み代に使ったんですよ

吉木 違うと思うけど……。

飯田 じゃあ吉木さんはなんだと思います？

吉木 ええ……高野君は？

高野 俺？

吉木 何してる人だと思う？

高野 なんでしょうね。話すと、結構素朴な人なんですよね。

吉木 でも勝率9割以上なんでしょ？

高野 や、でも変に熱中してるんじゃないんですよ。勘に頼るんじゃないくて、過去の大会をずーっとノートに記録してて、そこから統計学的に当てに行く、みたいな。

吉木 それ、相当やってると思うけど。

高野 いやいや、あくまで趣味なんですよ。飯田ちゃん、俺は賭博師ではないと思うよ。

飯田 じゃあ、なんなんですか。

高野 そうだな、ホテルの支配人なんてどうか。

吉木 どうして？

高野 やっぱりスーツ姿がサマになってるし・・・それに、ほら、常務はよく出張とかで泊まったりするし。

吉木 なるほど。なくはないわね。

飯田 ね、吉木さんはどう思います？

吉木 えー・・・。

吉木、しばらく考え込む。

吉木 いや、挨拶いつてくるわ。

高野

ちよちよ待ってくださいよ。

吉木

何。

高野

こういうのは、賭けるのが楽しいんじゃないですか。

吉木

私はそういうのしないから。それに、ずつとはつきりしないのって嫌いなもの。

高野

おお。

吉木

それに、大事なお客さんだったら、自分から挨拶しなきゃ失礼だし。

飯田

あつ私も行きます。

高野

お、おい。

吉木、飯田、竹内常務と西島の方へ向かっていく。

高野も後に続く。

竹内と西島は楽しそうに話している。

吉木

竹内常務。

竹内

おお。

吉木

(西島をみて微笑む) こんにちは。

西島

あ、どうもね。こんにちは。

吉木

常務、こちらの方は……。

竹内

おお、すまんすまん、まだだったね。西島さん、こちら、うちの事務の吉

木

木です。

吉木

はじめまして。吉木と申します。

西島 ああ、はじめまして。

竹内 こつちも事務員さんね。飯田です。

飯田 飯田と申します。

西島 はい。はじめまして。

竹内 で、

西島 高野君ね。

高野 あ、覚えてくれて嬉しいっす。

西島 はは。

竹内 飯田、吉木、こちら、背広職人の西島さんだ。

西島 西島です。どうぞ宜しくお願いします。

吉木 背広職人さんなんですか。

西島 そう。背広を作ってるの。

吉木 まあ、ステキですね。

竹内 まあ、吉木、このスーツも、実は西島さんが作ってくれたんだ。

吉木 そうだったんですか。いやあ、ダンディですね。

竹内 ははは。

西島 社長さん、暑いでしょ、スーツ。私に構わず脱いでください。

竹内 いーえいーえ、これ着ると、気持ち引き締まるんですよ。ま、とにかく西島さんには世話になってるからな、招待したんだ。

西島 いやいや、おじゃましてすみませんね。

吉木 いえいえ、とんでもない。

竹内 旅行中、西島さんに失礼の無いようにな。

吉木・飯田・高野 はい！

竹内 おい、後ろにクーラーボックスあったろ。ビール持って来い！

高野 はい、ただいま！

吉木 では、これで。

西島 はいはい、どうもね。

吉木、飯田、高野、後部席へ行く。

吉木 違うじゃない。

飯田 賭博師じゃなかったですね。

高野 まさか背広職人とは。

飯田 高野さん、わたし、ビール持っていきます。

高野 ああ、悪いね。

飯田、クーラーボックスを開けて、ビールを取り出す。

吉木 でも、ほんとうかしら。

高野 え？

吉木 あの人、ほんとうに背広職人？

高野 だって、常務がそう言ってたじゃないですか。

吉木　そうだけど、背広作ってもらって、それで社員旅行に呼んだりする？

高野　ん、まあ、よっぽど常務と気があつたんでしよう。

吉木　ほんとにそれだけかしら。なんか、ちよつと怪しいなあ。

高野　そんな、疑つたつて、どうしようもないですよ。

吉木　常務、もしかして、あの人に弱みを握られてるんじゃない？

高野　よわみ？

吉木　もつと、情報が欲しいわね……。飯田ちゃん、席移動しましょう。

飯田　え？なんで？

吉木　もつとお話聴きに行きましょうよ。高野くん、いろいろお話聞いてみてく

高野　れない？私と飯田ちゃんは、後ろの席で聞いているから。

吉木　え、一緒に飲めばいいじゃないですか。

吉木　あんまり大勢だと怪しまれるでしょ。

飯田、吉木と高野にビールを差し出す。

吉木と高野、受け取る。

飯田

さん、

三人、竹内と西島のもとへ行く。

吉木と飯田は後ろの席に座る。

高野は、2人の席の前の席に行く。

高野 常務、西島さん、どうぞ。

竹内 おう。

西島 ありがとう。

高野 ご一緒していいですか。

西島 どうぞどうぞ。

竹内 よし、では・・・

三人、缶のプルタブに手をかける。

高野 では、西島さんの背広に、乾杯！

全員 乾杯！

全員、ビールを飲む。

竹内 あーっ、うまいなあ。

西島 ほんとですねえ。

高野 西島さんはお酒強いんですか？

西島 いや、そんなに強くないですよ。

高野 え、そうなんですか。

西島 好きは好きなんですけどね。すぐ赤くなっちゃって、からかわれるんですよ。

高野 へえ、お店の人にですか？

西島 お店の人？

高野 さつき言つてたじゃないですか。喫茶店で、貸切で飲んだって。

西島 そうそう。オーナーさんにも、飲み友達にも、いろいろ言われるんですよ。

このまえ月世界に行ったときなんかは、西島さんには烏龍茶しか出しませ  
んつて言われちゃつて。はは。

竹内 西島さんは弱いのに、飲みたがるからタチ悪いんですよ。

西島 いや、やっぱり普段飲まないから、こういう時くらいって、思うじゃない  
ですか。

竹内 でもこの前みたいに酔いつぶれないでくださいよ。あの時、私が全部酒代  
払ったんですから。

西島 え！も、申し訳ない、おいくらでした？

西島、あわてて財布を取り出す。

竹内 わははは、冗談ですよ。冗談。

西島 もー、ビックリしたー。

二人、笑う。

高野 どこでよく飲まれるんですか？

西島 この前は、月世界に行きましたよ。

高野 月世界？

西島 砂津のほうにあるんですよ。

竹内 キヤバレーだよ、キヤバレー。

高野 キヤバレーにも行かれるんですか。

西島 いや、自分からは行かないんですけどね。誘われたら行くというかね。

高野 へえ。

後ろの席の飯田、反応する。

飯田 キヤバレーってなんか怪しい匂いがしますね。

吉木 男の人だったら皆行くわよ。まだこれだけじゃわからないわ。

竹内 西島さん、この前けっこうモテましたよね。

西島 いやいや、この前の子は、知り合いだったんですよ。ずっとからかわれてて。

竹内 でも、美人ばかりにもてますからね、羨ましいですよ。

高野 へええ、今度僕も連れて行ってください。

竹内 会員制だぞ、そのキヤバレー。

西島 いえ、高野さん、行きたい時は言ってください。私になんとかしますから。

高野 え、紹介してくれるんですか。

西島 ま、いろいろしますよ。

飯田 いろいろって、何するんでしょか。裏で賄賂でも渡すんでしょか。  
吉木 (小声で) 高野くん!

吉木、高野に手招きする。

高野 え?

竹内 なんだ、お前たち、そんなところにいたのか。

吉木 あ、はい、

竹内 一緒に飲めばいいじゃないか。

吉木 そ、そうですね・飯田ちゃん、ご一緒したら?

飯田 え、吉木さん。

吉木 ちよつと高野君、こっち。

吉木、高野、後部座席の方へ行く。

高野 なんですか。

吉木 やばいって、一緒にキャバレー行ったら。

高野 別にやばくないですよ。

吉木 あとで、絶対すごい請求が来るのよ。きっと。

高野 そんな、疑い過ぎですって。話したらわかりますよ。俺、あの人、好きですよ。なんか素朴でさ。

吉木  
高野 さん、とりあえず今度は飯田ちゃんの活躍に期待しましょう。  
活躍って。

吉木、高野、西島たちの後ろに座る。

飯田 月にどれくらい、背広を作られるんですか？

西島 そうだねー、まあ・結構作るよね。

飯田 結構？

西島 その月々によって違うんだよね。不思議なもので、仕事って、来るときは捌ききれないくらいくるけど、暇なときはずーっと暇なんだよね。

飯田 具体的に、一着作るのにどれくらいかかります？

西島 どうだね、最低1週間はかかるよね。もつとこだわりたいなら、3週間は欲しいし・。

飯田 お店のコンセプトとか、ありますか？

竹内 飯田、インタビューみたいだな。

飯田 あ、ふふ、いえ、ちよつと、いろいろ興味があつたのでつい。失礼しました。  
西島 いえいえ、こんなふうに初めてのひととたくさん喋るのは楽しいですよ。ね、なんでも聞いてくださいな。

竹内 優しいですねー、西島さん！よろし乾杯！

竹内・西島・飯田 乾杯！

三人、とりあえずビールを飲む。

製鐵のタオル

作 坂井 彩

【登場人物】

娘（製鐵のお偉い宅で住み込みのお手伝いさんをしている。22歳）

母（早くに夫を亡くし、女手ひとつで4人の子供を育てる。43歳）

実家の居間。夕方くらい。

娘と母がテーブル（座卓？）を囲っている。

テーブルの上には、大量のタオルが積んである。

二人は、それを黙々と畳んでいる。

母 あんた。

娘 なん？

母 それ、ちょっと貸さんね。

娘、畳んだタオルを渡す。

母

こんな畳み方して…

娘 母 娘 母 娘 母 娘 母 娘 母 娘 母 娘 母 娘 母 娘 母 娘

と、いいながら畳み直す。

ええ、綺麗に畳んどるやん。

文字が表やない。

いいよ、そんなん。

(文字を指して) ほら。

製鐵の名前が入つとるだけやない。

それが大事なんよ。全部畳み直し。

えー。

伸ばし方が甘いんよ、(手で高さをとって) こんなんなつとるやないの。  
うるさいなあ。

あんた、ご迷惑かけよらんやろうね。

大丈夫。

タオルもろくに畳めんのに。

それは関係ないやろ。

手土産まで持たせてもらって…

手土産って…

なんね。

これは、ただ余りを処分したいだけやけ。

…お休みもらって良かったん?

「お家の方よろしくね」って、そういうことやろ。

娘 母 娘 母 娘 母 娘 娘 母 娘 母 娘 母 娘 母 娘 母 娘 母 娘 母

：みなさん、お元気？  
うん。

奥さまは？

元気、元気。

お嬢さんたちも？

毎日一緒に遊びようよ。

左官屋さん。

うん。

ぱったり来んけど。

体調崩しとったんよ。

そう。

今は元気に働いとるよ。

ふーん。てつきり、お母さんが怖くて来んのかと思った。

…。

ねえ、今度ちゃんと謝ってよ。

どうして？

あんな怒鳴りつけて。

それは悪かったわよ。声一つ出せんかったみたいやし。

「すみませんでした」って言っとったやない。

まあ、夜遅くに娘連れまわされたらねえ。

そういうんやないって。

母 娘 母 娘 母 娘 母 娘 母 娘 母 娘 母 娘 母

だったら、なんね。

送ってもらったんよ。

ちよつとくらい何かあったやろ。

だから、なかって。

本当に？

本当に。

情けない男やね。

はあ？

押しが弱いんよ。

大事にしてくれてるんよ。

まあ、わかるんやけどねー。それだけじゃいかんよ。

じゃあ、どうすればよかつたんよ。

手ぐらい、どうにかできたやろう。

え？

だって、これだけよ。

といて、娘の手を握る。

娘、急いで手を振りほどく。

タオルで手をごしごし拭く。

娘

お母さん、左官屋さん嫌いなんやろ。

娘 母 娘 母 娘 母 娘 母 娘 母 娘 母 娘 母 娘 母 娘 母 娘 母 娘 母

嫌いじゃないっちゃ。

嫌いやん！

あそこで、文句ひとつ言わんで謝ったんは立派やった。

…。

嫌いになつて欲しいん？

そういうわけやないけど…

じゃあ、なんね。

…あの人じゃいかんの？

あんた、どうして製鐵のお家で働いてんの。

…。

こんなタオルのために、外へ出したんやないんよ。

…。

大体、左官屋なんて安定せんやん。

でも、真面目に働きよるし。

それだけじゃ、ままならんやろ。

…。

外で仕事してる時に、あの人が怪我でもしたらどうするんね。あんた、男に見合う稼ぎいかやろ。

頑張るよ。

気持ちだけじゃ、どうにもならんって言いよるんよ。

…。

母 娘 母 娘 母 娘 母

闇米だけじゃ暮らせんよ。

それも立派な仕事やっつたろ。

お母さんには、それしかなかつたんよ。

…製鐵とか、左官とか、そんなん関係ないし。

関係ないなら、製鐵の人を選びなさい。

お母さんだつて、たまたま好きになつたんが製鐵の人やつたんやろ！

言いたいとはそれだけね？

娘、タオルを適當にとつて、母に投げつける。

娘

…ごめん。

母、投げつけられたタオルを拾う。

黙つて、それを畳み始める。

娘、顔を上げられない。

しばらくして、母、手元にあつたタオルを娘に放る。

娘、それを受け取る。

二人、黙々とタオルを畳む。

娘 母

あの人、何回ダメつて言つても、来るんよ。

…負けず嫌いやけ。

母 娘 母 娘 母 娘 母 娘 母 娘 母 娘 母 娘 母 娘 母 娘 母 娘 母 娘 母 娘

あんたのどこがいいんやろうか。

顔よ、顔。

はあ？

一目ぼれって、言っとったもん。

なんそれ。

手紙に書いてあった。

へえ。

「ずっと、あなたのこと見てました」ってよ。

ふーん。

お手紙いっぱいくれるんよ。

ダメって言っても、好きな者同士会うやろうに。

…ごめんなさい。

最後に会ったんはいつね？

体調、崩しようっち言ったやん。

…。

そんな時にね、手紙とお花渡しに行ったんよ。

…。

お見舞いだけと思って、すぐに帰ったんやけど…

…。

彼がね、「ありがとう」って、「おかげで元気になりました」って。

…。

娘 母 娘 母 娘 母 娘 母 娘

それだけよ。

他には？

もう会つたらんよ。

そうやなくって…、何か、隠しとるやろ。

別に。

今日、なんで帰ってきたんね。

…。

左官屋さんと何かあったんやろ？

ううん。

と言って、娘はタオルを畳み始める。

母は、しばらく娘の様子を伺うが、自分も作業をする。

二人、黙々とタオルを畳む。

しばらくして、

手…

ん？

手、繋いどったらよかったかなあ…

母、娘にさっと手を差し出す。

娘 母 娘

娘

なん。

母、娘の手をぐつと引つ張る。

ちよつとー。

：

もー。お母さんとじゃ意味ないんやけー。

：

母 娘 母 娘

母、目を合わさず、娘の手をぎゅつと握る。

…お母さん。

なんね。

どうしても、製鐵の人やないとダメ？

…。

絶対？

…それだけは、譲らんよ。

…うん。

娘 母 娘 母 娘 母 娘

しばらくして、

娘 母 娘 母 娘

あのね、結婚したって。

…え？

左官屋さん、結婚したんよ。

…。

これ、しまってくる。

娘、母の手をそつと離す。

タオルを持って、奥のほうに引っ込む。

母、うつむく。

娘、戻ってくる。

母、娘に背を向ける。

娘、テーブルに残っている製鐵タオルの山から一枚、母に差し出す。

母、それで鼻を思い切り噛む。

娘

うわ、汚っ。

娘、母の泣いてる姿をみつめる。

しばらくして、自分もタオルの山から一枚取り出し、顔に当てる。

母 娘

…あの人が、製鐵の人やったら良かったん？

…。

娘

どうしても、製鐵の人やないとダメ？

母、黙って頷く。

うたいましよう

作 坂井 彩

【登場人物】

清水くん (音楽の授業が大嫌い) 10歳

田中さん (音楽の授業が大好き) 10歳

木村先生 (音楽の先生。二人の担任。背広をびしつときた、喜怒哀楽のない人) 30代

小学校の音楽室。

田中さんと清水くんがオルガンを囲っている。

田中さん、教科書を開いてオルガンを前に苦戦している。

清水くん、だるそうにしている。

田中 ねえ、これ。これ何？

清水 …。

田中 ここ、ほら、出だしのところ。

清水 …。

田中 下から、1、2本目の線に刺さってるやつ。

清水 …。

田中 わかる？ この4つて書いてある横のなんだけど…

清水 …ソ。

田中 そ？

清水 ソ。

田中 なるほど、「ソ」かあ。

田中さん、教科書に「ソ」とメモする。

オルガンで音を出そうとする。

指でなぞりながら、「ソ」を探す。

田中

ねえ、「ソ」ってどれ？

ド、レ、ミ、ファ、ソだから5番目か。

田中さん、一番低いところから5番目の鍵盤を押す。

田中 え、めっちゃ低くなかった？

清水 …。

田中 上の黒いとこの5番目とか…

清水くん、黙って「ソ」を押す。

田中

…。

清水くん、黙ってもう一度「ソ」を押す。

田中

もう一回。

清水くん、「ソ」を押す。

田中さん、「ソ」を押す。

田中

「ソ」って、こんな音だったっけ。

清水くん、「ソ」を押す。

田中

何かさー、しっくりこないよねえ。

清水

どこが？

田中

なんか、こう、ちがうよねえ？

清水

しらないよ。

田中

もつと低くなかった？

清水

え？

田中

気持ちもう少し低かった気がする。

清水くん、「ソ」を押す。

田中　　ここらへんじゃない？

と、言って鍵盤を押す。

清水　　それ「ミ」だよ。

田中さん、もう一度「ミ」を押す。

清水　　だから「ミ」だってば。

田中　　なんか、「ソ」を押しながら（これよりも、「ミ」を押しながら）こっちのほうが好きだなあ。

清水　　はあ？

田中　　なんか気持ちよく歌えそう。

清水　　でも「ミ」だから。

田中　　絶対？

清水　　は？

田中　　どうしても「ソ」じゃないとダメ？

清水　　教科書に書いてあるじゃん。

田中　　うーん。

清水

なあ、早く帰ろうよ。

田中さん、「ソ」の音を覚えるために、何回か押す。

田中

「ソ」、「ソ」、「ソ」

田中さん、楽譜をじーっと見つめる。  
「ソ」を連打する。

清水

何してんの？

田中

だってそう書いてあるもん。

清水

違うよ、ちゃんと音程とらなくちゃ。

田中

何それ。

清水

ここにさ、4が2つかいてあるじゃん。

田中

うん。

清水

4分の4拍子だから、

田中

そんな難しいこと言われてもわからない。

清水

だからさ、

田中

弾いてみて。

清水

えー。

田中

その4分のなんとかわかるんでしょ？

清水くん、「うたいましょうよ」の冒頭を弾く。

田中  
もう一回。

清水くん、もう一度弾く。

田中さん、清水くんのマネをして弾いてみる。

清水  
そうそう。

田中さん、もう一度弾く。

田中  
ねえ、続きは？

清水  
え？

田中  
最後まで弾こうよ。

清水  
でもさあ、

田中  
何？

清水  
先生に見つかったら：

田中  
ごめんなさいって言えばいいじゃん

清水  
えー

田中  
一緒だから大丈夫だよ。

田中さん、続きを弾こうとする。

ねえ、「ド」だつて。

：

「ソ」がここでしょ？

うん。

清水 田中 「ド」に行くには、何ご戻ればいいんだっけ…  
清水 田中 。

田中さん、言われたところに指を置く。

清水

「ド」「レ」「ミ」「ファ」「ソ」

田中さん、ドレミファソ、と弾く。

田中さん、はじめから弾いてみるが、途中でわからなくなる。

清水くん、弾いてみる。

田中さん、マネして弾いてみる。

清水

おお！

田中 できたよ！

清水

やったじゃん。

田中

ねえ、ねえ。

清水

なに？

田中

この下のやつは？

清水

これは、左手で弾くんだよ。

田中

どうやるの。

清水

今のを右手で弾いて、下のを左手で弾くの。

田中

同時に？

清水

そう。

田中

無理だよ。

清水

先生は、そうやって弾いてるよ。

田中

清水くんは？

清水

できないなあ。

田中

じゃあ、二人でやろう。

清水

え？

田中

私がさっきのとこ弾くから、清水くん下ね。

田中さん、清水くん、頑張って二人で弾いてみる。

田中さんがつかえたりして、なかなか合わない。

しかし、何回か繰り返し返すうちに、少しずつ形になってくる。

田中 清水くん、上手だねー

清水 合わせて弾いてるだけだよ

田中 それって難しいよ

清水 みればわかるし

田中 同じ授業受けてるはずなのにねー

清水 教科書ちゃんと見てないからだよ

田中 え、みてるの？

清水 は？

田中 わたし、みたことないよ

清水 え？

田中 だって、歌うときって、別に見なくていいでしょ

清水 見なきゃ歌詞とかわかんないじゃん

田中 歌ってたら、覚えるよ。

清水 じゃあ、授業中、なに見てるの？

田中 木村先生。

清水 先生？

田中 だって、先生楽しそうなんだもん。

清水 …。

田中 みんなよりも気持ちよさそうに歌ってるよ。

清水 おれ、木村先生、好きじゃないんだ。

田中 どうして？

清水 怖いじゃん。

田中 どこが？

清水 無表情で無口なのに、音楽の時にいきなり歌いだすところ。

田中 そうかなあ。

清水 それに、音楽の授業ばつかするの嫌だ。

田中 いいじゃん。

清水 他のクラスから何て言われてるか、知ってんのかよ。

田中 さあ。

清水 歌ばつかの歌バカー組だよ！

田中 うん。

清水 いつも楽しそうで良いですねーってさ。

田中 羨ましそうにしてるじゃない。

清水 お前、本当にバカだな。

田中 いいよ、別に。楽しかったらそれでいいもん。

清水 …。

田中 清水くん、ピアノ教えてるとき楽しそうだったじゃん。

清水 え？

田中 木村先生も同じなんだよ。

清水 …

田中 相手が楽しそうにしてると、自分も嬉しいでしょ？

清水

：

田中

ねえ、清水くん、時間まだ大丈夫？

清水

大丈夫だけど：

木村先生が音楽室へ入ってくる。

田中

すみません、すぐに帰ります！

先生

いや、ここにいなさい。

清水くん、こっそり帰ろうとしている。

先生

清水も戻りなさい。

清水くん、引き返してくる。

先生

田中、教科書を貸しなさい。

田中さん、先生に教科書を渡す。

木村先生、それを受け取り、ピアノに座る。

先生

二人ともこっちへ来なさい。

田中さん、清水くんピアノのそばへ行く。

先生 この音は何だ。

田中 じゃあ、今から一緒に空き地いこう。

清水 なんで？

田中 いいから。

清水 なにするの？

田中 清水くんには、音楽の先生になってもらいます。

清水 いやだ。おれ、そういう遊びはしないから。

田中 いいじゃん。意外に楽しいかもよ。

清水 えー。

田中 わたし、今度は「ミ」で弾いてみるね。

清水 だから「ソ」だって。

田中 ためしに弾いてみたら、面白いかもしれないでしょ。

と、言いながら二人は教室から出ていく。

先生が教室に入ってくる。

オルガンの上に、田中さんの教科書。

田中さんの教科書をばらばらめくる。

先生、オルガンに座り、「うたいましょう」を弾き始める。

と、手を止める。

先生、「ミ」の音で「うたいましょう」を最初から弾き始める。  
先生の表情は、少し楽しげである。

バイオリン弾き〜戸畑 夜宮青少年センターにて〜 作 鵜飼秋子

【登場人物】

保山

宮村

稲元

夏、日が落ちた薄暗い部屋。

稲元、部屋に入ってくる。

稲元、闇を見ている。

稲元

何やってんの。

宮村

・・・。

稲元

・・・。

宮村

・・大しことねえよ。

保山

・・わ。

稲元

・・わ。

宮村

おう。

稲元

うん。

保山

お前どうしたんだ。

稲本

どうって。

保山

随分練習に来なかったからさ。

稲元

うん。

保山

・・・。

宮村

なあ。

稲元

二人こそどうしたの。

宮村

あ？

稲元

暗闇で。

宮村

ああ、日が落ちたんだな。

保山

目が慣れて気が付かなかっただけ。

保山、電気をつける。

稲元

随分、探した。

宮村

なんで。

稲元

先週来てもいなかったからさ。

宮村

いたぞ。なあ。

保山

ああ。

稲元

ここに？

保山  
稲元  
宮村

うん。  
そう。  
変なやつ。

稲元は、クーラーを入れる。  
ブオーという音。

保山

・・お前、クーラー高けえぞ。

稲元

・・。

保山

今から3時間使ったら千円とられっぞ。

稲元

いいよ、別に。

保山

さすが。

宮村

練習、練習！

保山と宮村、譜面台を用意し、椅子に腰かける。

稲元、入口近くに置いていた大荷物を取りに行く。

稲元は保山に荷物を手渡す。もうひとつを宮村に手渡す。

保山  
稲元

なんだこれ。  
開けて。

保山と宮村は受け取った荷物をほどく。

宮村 おお・・・。

保山 いいな・・・。

稲元 ・・・・。

宮村 どうしたん。

稲元 あげる。

保山 は？

宮村 どうしたんよ、これ。

稲元 作った。

保山 誰が。

稲元 自分が。

宮村 は？

稲元 ・・・・。

保山 え？

稲元 自分が。

宮村 またまた。

保山 嘘つくなって。

稲元 ほんと。

宮村 え？

稲元 ほんと。

保山

・・すげえ。

宮村

信じるなよ。誰からもらったん。

稲元

イタリアに行つて。

宮村

おう。

稲元

木を買つた。

宮村

おん。

稲元

現地の職人に作り方を教えてもらつて。

宮村

ほお。

稲元

削つて作つた。

保山

すげえ。

宮村

いや、だから信じるなつて。

保山

だつて作るつてすげえやん。

宮村

なんでこんなんくれるん。

稲元

なんでつて。

保山

そうよ、お前使えよ。

稲元

二人が使うかなと思つて。

宮村

お前、仕事どうしたん。

稲元

どうつて。

宮村

イタリア行つとたんやろ。

稲元

辞めた。

宮村

は

稲元

辞めるよ。

保山

嘘やろ。

稲元

3か月も休めるわけないじゃない。辞職願い出したよ。

宮村

・・。

保山

・・。

宮村

どうするんか。

保山

次、なんか決まっとるんか。

稲元

職人になりたかったから。

宮村

は？

稲元

バイオリンの。

宮村

お前、そんなこと今までひとつも言ったことないやん。

稲元

飽きた。

保山

はあ？

宮村

何が。

稲元

え？仕事。

保山

お前なあ。

宮村

俺らはどうなるんよ。

稲元

なにが。

宮村

役所でいまだにあせくせと働いとる俺らはどうなるんよ。

稲元

え？いいんじゃない。飽きてないんだったら

宮村

お前、馬鹿にしてんの。

保山 まあまあまあ、ちよつと。

稲元 どこ行つとつたん。

宮村 あ？

稲元 お前から先週どこ行つとつたん。

保山 いたよ。

稲元 ここに？

保山 うん。

稲元 来たけどおらんやった。

保山 久しぶりに来て部屋間違えたんやない。

稲元 いや。

保山 それか、水曜日じゃなくて別の曜日に来たとか。

稲元 いや。

宮村 お前、役所やめてこれからどうやって暮らすん。

稲元 . . .

宮村 バイオリン職人とか、そんなん食っていけるわけないやろ。

稲元 うん。

宮村 そんな夢みたいなこと言うなよ。

保山 もういいやろ。

宮村 お前もうちよつと真剣に考えろよ。

稲元 考えてる。



保山 きれいな曲線や。

宮村 ・ ・ ・。

保山 すげえよ。なあ。

宮村 ・ ・ ・。

稲元 弾いてみて。

保山 いいん。

稲元 うん。

保山 よし。宮村、お前弾け。

宮村しぶしぶバイオリンを構えてA弦の音色を出す。

宮村 ・ ・ ・。

保山 いいな。

稲元 うん。

保山 うん、いい。いいぞ。

宮村、黙っている。

稲元 弾いてみて。

保山 俺？

稲元 はい（弓を手渡す。）

保山

おう。

保山、A弦の音を出しているが、ひどい音。

保山

いいよ。すごくいい。

稲元

・  
・  
・。

宮村、保山のバイオリンを手にとり、Aの音を出す。  
良い音。

宮村

大丈夫だ。

稲元

良かった。

保山

んだよ。

宮村

いい。

稲元

あげる。

宮村

・  
・  
・。

稲元

二人とも。

保山

これ？

稲元

うん。

宮村

・  
・  
いいんか。

稲元

うん。

保山 これ、いくらするん。  
稲元 さあ、五十万くらい？  
宮村 よし、くれ！  
保山 本当にいいんか。  
稲元 いいよ。  
保山 もらった。  
稲元 もう一回出してみて。

三人それぞれのバイオリンを構え、Aの音を出す。

稲元 あれ、やろう。  
保山 おう。  
宮村 よし。

メトロノームを動かす宮村。  
三人息を合わせ、演奏を始める。  
バツハ「G線上のアリア」  
三人とも綺麗な音色を出す。

演奏が終わり、メトロノームを止める。  
保山と宮村、バイオリンの手入れを始める。

稲元も、バイオリンをゆっくり片づけている。

宮村  
保山

クーラー切って。  
ああ。

保山、部屋のクーラーを切る。

部屋が急にシンとする。

保山

どうやったか

稲元

どうって。

宮村

うん、良かったんやないんか。

保山

いいよなあ。

稲元

まあまあね。

宮村

この曲ばかりやったからなあ。

保山

これが好きなんよ。

宮村

いやこれしか弾けんのよ。あいつも上手くねえもんなあ。

保山

「も」ってなんや「も」って

稲元

お互い様ね。

宮村

ただまあ、バイオリン作るっちゃ大したもんや。

保山

趣味が高じて作ろうと思うやつは、あいつくらいやな。

宮村

まあな。

稲元

今さら？

保山

ずーっと良い音出しよるなあ。

宮村

ああ。

保山

他に使う気せんな。

宮村

お前、上手くなったな。

稲元

うん、上手くなった。

保山

当たり前や。俺さあ、思うんやけどあいつに金払ってないんよね。

宮村

そりゃ、俺もや。あん時、勢いでもらったからなあ。

保山

あいつも「あげる」って言いよったしなあ。

宮村

言いよった、言いよった。

稲元

言ったか？

保山、窓を開ける。

外から静かな森の音が入ってくる。

宮村

何年経つ。

保山

20年。

宮村

そうか。

保山

変わらんな。

宮村

・・・。

保山

ここも変わらんな。むかしから建物は古いまんまやし。

宮村 俺さ、最近になつて思うんよな。あいつ、あん時、自分がもうそんなに長

くないつて知つとつたんやな。

保山 ん？うん．．．そうかも知れんな。

宮村 だからさ、辞めたんやろ。

保山 まあ．．．そうかもしれん。

宮村 なんか残したいつて思つたんやろな。

保山 ．．．。

宮村 全然わからんやつたなあ。

保山 まあ．．．わからんよ。

宮村 独身やからそんな勝手なこと言えるんやろと思つとつた。

保山 まあ、わからん。本人だつてわからんかも知れん。

宮村 ．．．。

保山 ただな、今までずーつと使えとるからな、これ。

宮村 ああ。

保山 すげえよ。

宮村 すげえな。

保山 来年やな。

宮村 あ？

保山 来年ここでまたG線上のエリアや。

宮村 おう。

保山 来年の方がたぶん良い音だすぞ。

宮村

喜んどのやるか。

保山

金払えっつていいよるやるか。

宮村

そげな男やないやる。

保山

そうやな。

二人、バイオリンの手入れを終え、バイオリンを椅子に置く。

稲元もバイオリンの手入れを続けている。

宮村

行こうか。

保山

おし。

保山と宮村は部屋の電気を消し、バイオリンを置いたまま部屋から出ていく。

開けっ放しになった窓。

稲元は窓に近寄り、外を眺めている。

静かな気配

稲元はひとり、G線上のエリアを弾く。

稲元、置いていかれた二つのバイオリンに向かって。

稲元

どうだ・・・クーラー代払わないけん。

森の闇と音が部屋を包み込む。

待つ女（小倉 ある駅で）

作 鵜飼秋子

【登場人物】

葉子

かな

マリ

日が西へと傾いている。

昭和35年頃。ある駅で。

改札前の椅子に腰かけている女が3人いる。

斜陽が三人の女の顔を赤く照らしている。

ふいに一人が口を開く。

マリ

お手洗いどちらにあったでしょうか。

他の二人はどちらに声をかけられているのかわからず黙っている。

三人

・ ・ ・

葉子

・ ・ ・ あちら。

マリ

はい。

マリは席を立たない。

三人とも黙って座っている。

葉子

・ ・ ・ 案内しましょうか。

マリ

いえ、その、場所だけ確認しておきたかったですから。

葉子

・ ・ ・ ああ。

三人、ふたたび黙って座っている。

ふいに。

かな

日が、暮れてきましたね。

マリと葉子は、かなの顔を見る。

かなは少し目を細めている。

葉子

そちらは眩しいんじゃないでしょうか。

かな

ええ、西側なのかしら、少し。

葉子 それなら、私と代わりましょう。こちらのほうが幾分。

マリ いえ、私の席の方がいいわ、こちらの方が、ほら、東側で、少し陰になっ

て直接は当たらないんです。

かな このままで大丈夫です。

葉子 遠慮しなくていいのよ。さ、どうぞ。(かなに席を譲る)

かな ・・すみません。

葉子とかなは席を替わる。

葉子 あ、眩しい。

マリ ほら、やっぱり、私の席と代わりましょう。

かな 元に戻りましょう。

葉子 いいえ、いいのよ。もう少しばかり待てば日は落ちるでしょうから。それまでの辛抱です。

三人はそれぞれの席で少し落ち着く。

かな ・・・随分人通りが少なくなりましたね。

マリ・葉子 ・・・(頷いている)

葉子 さっきの夕立のせいで少し涼しくなりました。

マリ・かな ・・・(頷いている)

マリ 昨日の満月は見ましたか。

かな はい。

葉子 本日に大きなお月様だったわ。

マリ 今日は少し欠けるんでしょうけど。

かな 満月の時にしかああいいう大きさにはならないんでしょうか。

マリ ええ、私が見るときはいつも満月です。

葉子 変な色をしていることもあるものね。

マリ 今日は満月のようにだけど、きつとふつうのお月様ね。

改札口からひとり人が出てくる。

マリ あの人、昼ごろ見たわ。

葉子 ああ、大きな荷物を背負って。

かな 私も見覚えがあります。確か改札を通過してホームに。

葉子 用事が終わって帰ってきたんでしょうね。

マリ 大きな荷物、ハイキングにでも行ったのかしら。

かな そんな出で立ちですね。

葉子 平尾台か何かに行っただんでしょう。

かな 誰と行ったんでしょう。

マリ そりゃ女の人とでしょう。

葉子 でも一人で改札口から出てきたわね。

マリ 最寄りの駅が違うんで汽車途中でさよならしたんじゃないの。  
葉子 まあ何にしても楽しかったんでしょねえ。  
マリ 足なんか泥まみれになっちゃってねえ。  
かな こちら側に座ると改札口の様子がよく見えるんですね。  
葉子 ええ、そうなのよ。  
かな 駅員さんがこちらを見えています。  
葉子 さつきからこつちをチラチラ見ているのよ。  
かな そうですか。  
葉子 何がそんなに面白いのかしらねえ。  
かな ええ。  
マリ 私たちに話しかけてくたしょうがないのよ、きつと。  
葉子 あの・・・お手洗いには行かなくていいのかしら。  
マリ え、ああ・・・大丈夫よ。  
かな あの、私はここにいますから。どうぞ行つてください。  
葉子 さあ、（お手洗いに）行きましようか。  
マリ いいのよ。ほら、席を立った間にすれ違つてしまうかもしれない。  
かな 特徴か何かを行つてくだされば、私、引き留めておきますわ。  
マリ いいえ、コレとって説明できるほどの特徴がありませんから。  
葉子 でも、あなた先ほどから一度もお手洗いに行かれてないじゃない。  
マリ 本当に大丈夫。私、手洗いが遠いのが取り柄ですから。

かな

では、私ここを通りすぎる人をみんな引き留めておきますわ。もう、通る人も少ないですからそれくらいのことはお安い御用です。

マリ

そうね、それじゃ、本当に切羽詰ってきたらお願いすることにするわ。今は大丈夫。

葉子

あまり無理しないほうがいいわ。もう駄目だと思ったらすぐに、駆けだして頂戴。私が付いていくから。

マリ

ありがとう。

かな

あつ。

かな、途端に駆け出し、改札口へ走りだす。

残された二人は、かなを見守る。

葉子

そつちじゃないわ。

マリ

違う。

葉子

お手洗いじゃ。

マリ

ない。

葉子

．．みたいね。

マリ

あの人．．．。

葉子

かしら．．．。

かな、元の場所に戻ってくる。

マリ あの人が。  
葉子 あなたが待っていた人なの？  
かな ・・・。  
マリ 違ったのね。  
かな ・・はい。  
葉子 似ていたの？  
かな 会ったことはないんです。写真だけ渡されていて。  
葉子 写真って、それはお見合い？  
かな ええ、まあ。  
マリ 何時に待ち合わせていたの。  
かな お昼頃という話で。  
マリ まあ、もう日暮れよ。  
葉子 何時間経っていると思ってるの。  
マリ それらしい人は来たの？気が付かなかったのかしら。  
かな 私が見逃したのかもしれないし。  
葉子 そんなこと言ったらって相手だってあなたのことを探すはずでしょう。  
かな 何か手違いがあつたんです、きっと。  
マリ 電話で連絡をとってみたら。  
葉子 そうよ、そうなさい。駅員さんに言ってあげるから。  
かな そうですね。明日にでも連絡してみます。

葉子

明日？

かな

ええ、今日はもう少しここで待つてみることにします。

葉子

明日じゃなくて今なさいよ。

マリ

そうよ、何も明日まで待つて必要はないじゃないの。

かな

今日はもういいんです。

葉子

あら、どうして！

マリ

連絡をとれば済むじゃないの！

かな

いいんです。

葉子

簡単なことだわ。

かな

いいんです！明日で！

マリ

なぜ？今すればすぐにでも決着がつくじゃないの！

葉子

そうよ、さ！今なさいよ！

マリと葉子はかなの様子を伺う。

かなは席に座り毅然と座る。

葉子

．．のんきねえ。

マリと葉子も元の席に戻る。

かな

．．お二人は？

マリ　　・・・。

葉子　　は？

かな　　お二人は、どうされるんですか。

葉子　　どうって。

かな　　まだ待たれるのでしょうか。

マリ・葉子　　・・・。

かな　　お二人ともわたくしより随分前からお待ちになってる。

マリ・葉子　　・・・。

かな　　いつの日か来られるんでしょうか・・。

マリ・葉子　　・・・。

かな　　よっぽどのんきな方たちですわ。

葉子　　あのね、お言葉ですけど、私よりもこの人（マリ）の方がうんと前から待っているの。

マリ　　嘘をおっしゃい。私が来たときすでにあなた（かな）はここに居たじゃない。

かな　　私が来たときには、あなた様（葉子）がここに座っていらっしやいました。いいえ、あなた（マリ）が先に座っていたもの。

マリ　　またまた。あなた（かな）がここに居たから私は安心して近くに座ったのよ。男性が座っていれば座らなかつたわ。

かな　　私はあなた様（葉子）がお手洗いに立たれるところを見ましたもの。

葉子　　だったら何だっていうのよ、それがどうして私のほうが先に来たことになるのよ。

かな

私とこちら（マリ）はまだ一度も行ってませんもの。きつとあなた様はお手洗に行かれるほどここに長くいらっしやるんだわ。それにこちら（マリ）もそろそろ行きたそうにされていたでしょう。ところが私はまだ全然平気ですもの。

葉子

お手洗いに行くか行かないかは待ち時間とは全く関係がないじゃないの。

マリ

そうよ、私とあなたは手洗いが遠いだけで、こちらは近いだけのことかも  
しれないから。

葉子

ちよつと、私近くないわよ。

かな

私が遠いほうの人間であることは間違いありませんわ。

葉子

なんで一回手洗いに立ったくらいのことですんな言われ方するのよ。

かな

これはとても大切なことです。

葉子

いい加減にして！

マリ

そうね、この話はそろそろやめて。

葉子

そうよ！

マリ

あなた（葉子）も落ち着いて。

葉子

ちよつとそういう切り替えしも腹が立つけど。

マリ

ねえ、時間は？みなさん何時にこちらに来たの。

葉子

え。

かな

時間ですか。

葉子

・・そんな、何時かなんてはつきりわからないわ。

かな

私はお昼頃。

マリ

私もお昼。

葉子

それなら私だってお昼。

マリ

じゃ、太陽は？太陽はどの辺に見えたの。

葉子

こちらよ、私がそちら（かなの場所）に座ったときにはちよう日が当たってまぶしかつたんですから。柱の影はこう（六時の方向）真っ直ぐ後ろに伸びていたんじゃないかしら。

かな

私が来たときには、影はもうこの辺（七時の方向）にあつたんじゃないかしら。

マリ

私が来たときには、この辺（八時）だったかしらね。

葉子

あらやだ、今はつきり思い出した。あのとき影は（九時）の方向だったわ。いくらなんでもそれはないわよ。そしたら、太陽がこっち（西側・三時）にあるってことじゃないの。

かな

それはちようど今ですわ。

葉子

・  
・  
・

葉子、自分の目の前の暮れかけた太陽を見つめる。

葉子

・  
まぶしい！

マリ

もう、やめましょう。

かな

ええ。

マリ

私たちきつと同じくらいにここに来たのよ。

葉子 ・・そうね。

マリ 同じようにここで待っている。

かな はい。これから来る人を。

葉子 待っている。

マリ そう。

葉子 そうね。それでいいわね。

三人とも夕日を眺める。

かな 日が山に入り始めましたね。

葉子 この瞬間ってお日様が動いてるんだって感じるわね。

かな そうして意外と動くのが早いです。

葉子 そうね。

マリ ここより西へ行けばまだ日が高いのでしよう。

葉子 ええ。

マリ じゃあ兄はまだ今から落ちる夕日を待っているんでしよう。

葉子 お兄さんはどちらに。

マリ 対馬よ。

かな 遠くにいらしゃるんですね。

マリ ええ。軍艦は対馬沖で沈んだですって。兄はその海に眠っているんでしようね。

葉子・かな . . . .

マリ 私のことすごく可愛がってくれたのよ。兄が帰ってくるとき、私は必ずこの駅まで迎えにきて。

葉子 そうなの。

マリ 今日は命日だから、またこの駅に戻って来るんじゃないかって。

葉子・かな . . . .

マリ (日が)落ちてしまいそうね。

かな ええ、あとほんの少し。

葉子 お兄さんを待っているの？

マリ どうなのかしら。

かな でもここにずっといらっしやる。

マリ ええ。

葉子 じゃあ。

マリ 私はこの瞬間を待ってたのかしらね。

目を眺める三人。

三人の顔を染めていた赤が少しずつ明度を落としていく。

次第に柔らかい青がにじみ始める。

マリ あなたは。

葉子 え。

マリ あなたが待っているのは。

葉子 私？

かな ええ。

葉子 私は待ってなんかいないわ。

かな でも、今までこうして・・・。

葉子 私の待ち人は先ほどここを通りすぎていったもの。

マリ 通り過ぎた？

かな ここを？

葉子 大きなリュックを背負っていたでしょ。

かな あ。

マリ あの人。

葉子 私と平尾台に行く約束をしていたのよ。

かな え、どういことですか。

マリ 確か足に泥をつけて。

かな 行っただんですよ、きつと。ハイキングに。

葉子 私が聞きたいわ。ひょうひょうと平気な顔をして改札から降りてきたものだから、あつけにとられて声をかける気もなかったわよ。

かな あちらは気づかなかったのかしら。

葉子 気づかないわよ。あの満足げな顔。約束はしていたけれど、会えな

マリ かったもんだからひとりで登りに行った、大方そんなところでしょう。

でもどうして会えなかったのかしら。

葉子

さあ、どちらかが時間を間違えたのかしらね。まあ、どちらにしも今日は平尾台に行かなくてよかったわ。あの人のあの恰好。私、あんな山登りをする準備なんてしてないもの。

二人は、葉子の恰好を見て笑う。どうみても山登りをする恰好ではない。

葉子

ね。(自分の恰好を見せながら)

マリ

ちよつと待って。

葉子

・・。

マリ

あの人いつ通りがかったかしら。

かな

リュックの人、ですか？

マリ

ええ。

かな

もう、ずいぶん前のような気がします。

マリ

そうよ。確か西日が差し込んでいたけれども、それでもあれから随分経

つわ。

かな

ええ。

マリ

・・嘘ね。

葉子

・・・。

マリ

あの人を待ってたなんて、絶対嘘ね。

かな

え。

マリ

だって、それが本当なら、あの人が通りがかってから今までのあいだ、あ

なたは何を待っていたっていうのよ。

・ ・ ・ そうか。

誰も待ってやしないじゃないの！

そう、ですよ。

ちよつと、ちよつと、変ないいがかかりつけないで頂戴よ。

いいがかりなんかじゃなくてよ。

どうして嘘をつくんですか。

嘘じゃないわよ。私は、リュックの男、あれと約束していたの。

マリ じゃあ、あの男が通り過ぎて、あなたとの約束をやぶってひとりで平尾台

に行っただとわかって。それからのあなたは誰を待ってたのよ。

葉子 だから、あの男を私は待ってるのよ。

マリ あなたは誰も待ってないじゃないの。

葉子 ・ ・ ・

マリ あれから今までどうしてここに居るのよ。

かな 待ち人は来てしまったのに。

葉子 ・ ・ ・

沈黙

葉子 かな

・ ・ ・ あなただっ  
え。

葉子

あなただって、待ってなんかじゃない。

かな

私ですか。

葉子

そうよ。昼に会おうと約束してこんな時間まで待つなんて、もう完全にすれ違ってるってわかるじゃないの。それなのに電話もしないで待ち続けるなんて不毛よ。本当にお見合いしようとしたのかも怪しいもんだわ。

かな

私は、きちんと約束しました。

葉子

それなら、あなた、その人に会いたくないんだわね。

かな

そんなことはありません。

葉子

なら、今すぐ電話すりゃいいじゃないの。それなのに「明日するから」って言ったつきり、じーっと座っているだけ。そりゃ本気で人を待つてるなんて言えないわ。だって会う気がないんだもの。その相手はよっぽど不細工だったのね。

マリ

やめなさい。自分の嘘を棚に上げてみっともない。

葉子

あんただってね。

マリ

なによ。

葉子

「(きどって)この瞬間を待っていたのかしらね・」って、なんで日暮れなんかを待たなきゃいけないのよ。

マリ

いいじゃないの。

葉子

よくないわ。そんなもん、なんで昼からいちいち待たなきゃいけないのよ。

マリ

私が待っているのは兄なのよ。

葉子

そうよね。言いたいことはわかるわ。

マリ

もう、これ以上言わせないで。

葉子

でもね。あなただっけどうせ本気で待っちゃいないのよ。だって意味がないでしょ。絶対に帰って来ないってわかってるんだから。

かな

やめてください！

マリ

・・・。

かな

もう、やめてください。

沈黙

マリ

・・・帰りましょう。

全員

・・・。

マリ

私たち、きっと、もう誰も待ってないんだわ。

かな

・・・そう、なのかもしれません。

マリ

ね。

かな

・・・ええ。

マリ

じゃ。

かな

はい。

葉子

・・・いえ、待っているわ。

マリ

え。

葉子

私たち、ここにいるんだもの。

全員  
かな  
葉子  
マリ

・・・。  
月。  
あら。  
本当だ。

三人は、東側の空を見る。

三人の顔は薄い青に染まっている。

葉子

満月のように見えて。

マリ

満月じゃないわね。

かな

大きくもないし。

マリ

変でもないわ。

葉子

普通の月ね。

三人は、なんとなく笑う。

これから夜が深まる。

## 【平成26年度 公演情報】

北九州芸術劇場＋市民共同創作リーディング

### 「Re:北九州の記憶」

日程：平成27年2月28日（土）・3月1日（日） 14時

会場：北九州芸術劇場 小劇場

#### 「構成・演出」

内藤裕敬（南河内万歳一座）

#### 「作」

穴迫信一（ブルーエゴナク）、鵜飼秋子（さかな公団）、坂井彩、塩津順子（のこされ劇場Ⅲ）、寺田剛史（HOCK）、藤本瑞樹（二番目の庭）、守田慎之介（演劇関係いすと校舎）、

脇内圭介（飛ぶ劇場）

#### 「インタビュー協力」

審亮一さん、荒木龍秀さん、池田輝康さん、今村淳子さん、江藤綾子さん、大島葉子さん、下川朝子さん、田中貞子さん、西島武さん、吉富治郎さん、吉本照さん

#### 「出演」

穴迫信一、内山ナオミ（飛ぶ劇場）、河口玲子（劇団C4）、高野由紀子（演劇関係いすと校舎）、寺田剛史（飛ぶ劇場）、野口和夫（演劇作業室紅生姜）、前元優子（劇団C4）、宮村耳々、守田慎之介、門司智美（有門正太郎プレゼンツ）、リン（超人気族）、脇内圭介

「スタッフ」

照明…大久保望\* 音響…杉山聡\* 衣裳…内山ナオミ (工房MOMO)

演出部…野坂卓弥 照明操作…磯部友紀子\* 大崩綾\* 音響操作…松岡大志郎\*

舞台監督…谷川哲朗\*

宣伝美術…トミタユキヲ (eCADHOC)

広報…鬼木身和\* 票券…中村智子\*

制作…吉松寛子\* 村松薫\*

劇場支配人…久末隆彦\*

プロデューサー…館長…津村卓\*

主催…(公財)北九州市芸術文化振興財団  
企画・製作…北九州芸術劇場

共催…北九州市

助成…一般財団法人地域創造